

充し海陸の軍備更張して自主國の權利を保存し海外萬國と對峙並行して相共に干犯凌辱無之様仕度因て審案仕候に各港輸出入物品稅の儀は素外商の來て貿易を事とするを許允せしむるに依り賦征致し候稅金にて其權利全く其政府の特裁に屬し決て國際公法に關するものと等しく各國へ協議決定すべき筋に無之は萬國普通の例規と存候處御國の儀は當初互市御允許の際多少紛紜も有之其間不得已情狀も有之候哉殊に右輸出入物品稅及貿易規則等一々之を條約書に綴り且其改革は彼此の協議を以て施行すへきものとし甚しきは内地の收稅にも繁累して聊其抑制を受け往々自主の權利を妨碍せられ候は實に痛苦の至に奉存候終に此儀因循致候ては將來如何可有之哉誠に一大關心の至に候万今百揆舉行庶政振興の際幸に前日の失措を挽回し累年の宿弊を釐正し固有の權利を保有候様仕度幸ひ來壬申年條約の更正の期に會し候儀にも有之候間篤と御詮議有之勉て萬國普通の公理に據り從來關涉の宿弊を脱し至公の條約に改定致し前書輸出入稅目等の儀は全く我の特裁に歸し物產の多寡流融の實況に應し便宜適正の處分相成候は、物產の洪利富強の基礎相立隨て特立の威柄も相備り可申事にて此條約改正の一舉は

實に御國の隆替に關涉し不容易事件にして然も其樞要は能普通の公理に體して至公の改定を遂げ前書輸出入物品稅及商則等全く我政府の特裁に歸せしむるに歸着可致儀と奉存候間厚く御參酌被爲在尙外務省えも御沙汰相成右更正の目途御審議相成候様仕度此段申上候也

辛未八月

大藏大輔 井 上 馨  
大藏卿 大久保利通

正院 御中

## 第二章 岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議

### 第一節 岩倉大使歐米派遣

四二 明治四年九月十五日假 三條太政大臣ヨリ 岩倉外務卿へノ  
西曆一八七二年五月十八日 諮問二通

#### 歐米各國へ使節ヲ派遣スヘキノ件並ニ改正スヘキ條約要目ニ關スル件

對等ノ權利ヲ存シテ相互ニ凌辱侵犯スル事ナク共ニ比例互格ヲ以テ禮際ノ殷勤ヲ通シ貿易ノ利益ヲ交ユ此レ列國條約アル所以ニシテ而テ國ト國ト固ヨリ對等ノ權利ヲ有スルコト當然ナレハ其條約モ亦對等ノ權利ヲ存スヘキハ言ヲ待タサル事ナリ

故ニ地球上ニ國シテ獨立不羈ノ威柄ヲ備ヘ列國ト相聯並比肩シテ昂低平均ノ權力ヲ誤ラス能ク交際ノ誼ヲ保全シ貿易ノ利ヲ齊一ニスルモノ列國公法アリテ能ク強弱ノ勢ヲ制壓シ衆寡ノ力ヲ抑裁シ天理人道ノ公義ヲ補弼スルニ由レリ是以テ國ト國ト對等ノ權利ヲ存スルハ乃チ列國公法ノ存スル

ニ此レ由ルト云フヘシ

今其國ノ人民其國ヲ愛スルハ亦自然ノ止ムヘカラサル所ナリ既ニ其國ヲ愛スルノ誠アル其國事ヲ憂慮セサルヘカラス憂慮既ニ此ニ反フ苟モ之ヲ實務上ニ徴シテ我國ニ存スル權利ノ何如ヲ審察セサルヘカラス既ニ之ヲ審察スルニ於テ果シテ其權利我ニ存シテ失ハサルカ或ハ之ヲ他ニ失シテ存セサルカ能ク之ヲ認メ得ヘシ之ヲ認メテ我國既ニ對等ノ權利ヲ失ヒ他ニ凌辱侵犯セラレ比例互格ノ道理ヲ得サレハ勉勵奮發シテ之ヲ回復シ其凌辱ヲ雪キ侵犯セラレサル道ヲ講究スル事其國人正ニ務ムヘキ職任ニシテ其國人タルノ道理ヲ盡スト云フヘシ而テ其凌辱侵犯ヲ受ケサル道ヲ講究スル之ヲ列國公法ニ照シテ其條約ノ正理ニ適スルヤ否ヤヲ考察セサルヘカラス

夫レ我國海外各邦ト條約ヲ結ビシ始メ國內ノ形勢如何ソヤ

積世鎖國ノ習俗固結シテ開港ノ事ヲ拒ムモノ滔々皆是ナリ攘夷ノ論ヲ發スルモノ比々皆然リ此レ舊政府擅權ノ私斷ヲ以テ此ノ全國ノ存亡ニ關係スル一大事件ヲ明白正大ナル輿論ト才智勇決ナル處置トヲ以テ其事件ヲ了局セス其目的一時糊塗シテ因循歲月ヲ經過スルノ方略ニ出ツ其事情止ヲ得サルノ勢ト雖到底官吏ノ懶惰ト姑息トニ由テ實際上其當ヲ得サル事夥多ナルノミナラス貿易上モ亦當然ノ理ヲ盡ス能ハサルモノ亦少カラス而テ其間我國内ノ多事ニ由リ強弱ノ勢ニ乘セラレ彼我權利ノ際限紛亂して或は主客地ヲ換ル事アルニ至リ益至當ノ則ヲ失ヒ窮極如何ヲ知ラサルニ至ラントセシニヨリ政體變革ノ始ヨリ既ニ失ヒシ權利ヲ回復シ凌辱侵犯セラル、事ナク比例五格ノ道ヲ盡サント欲スト雖從前ノ條約未タ改マラス舊習ノ弊害未タ除カス各國政府及各國在留公使モ猶東洋一種ノ國體政俗ト認メテ別派ノ處置慣手ノ談判等ヲナシ我國律ノ推及スヘキ事モ之ヲ彼ニ推及スル能ハス我權利ニ歸スヘキ事モ之ヲ我ニ歸スル能ハス我規則ニ從ハシムヘキ事モ之ヲ彼ニ從ハシムル能ハス我稅法ニ依ラシムヘキ事モ之ヲ彼ニ依ラシムル能ハス我力自在ニ處置スヘキ條理アルモ之ヲ彼ニ商議スヘキ事ニ至リ其他凡ソ

中外相關係スル事々件々彼是對等東西比例ノ通誼ヲ竭ス能ハス甚キハ公使ノ喜怒ニ由テ公然タル談判モ困難ヲ受クルニ至ル抑對等國ノ政府ハ在留公使ノ不可ナルモノアレハ公法ニ據テ之ヲ其本國ニ逐ヒ還ス程ノ權ヲ有スルナルニ其事體ノ此ノ如キノ凌辱侵犯ヲ受クルニ至テハ毫モ對等並立ノ國權ヲ存スト云フヘカラス比例五格ノ實際ヲナスト云フヘカラス故ニ痛ク其然ル所以ヲ反顧シ分裂セシ國體ヲニシ渙散セシ國權ヲ復シ制度法律駁雜ナル弊ヲ改メ專ラ專斷拘束ノ餘習ヲ除キ寬縱簡易ノ政治ニ歸セシメ勉テ民權ヲ復スルコトニ從事シ漸ク政令一途ノ法律同轍ニ至リ正ニ列國ト並肩スルノ基礎ヲ立ントス宜ク從前ノ條約ヲ改正シ獨立不羈ノ體裁ヲ定ムヘシ從前ノ條約ヲ改正セント欲セハ列國公法ニ據ラサルヘカラス列國公法ニ據ル我國律、民律、貿易律、刑法律、稅法等公法ト相反スルモノ之ヲ變革改正セサルヘカラス之ヲ變革改正スルニ其方法處置ヲ考案セサル可ラス之ヲ考案スルニ之ヲ實際ニ施行スル或ハ一年ヲ期シ乃至二三年ヲ期スヘキモノ有リテ一朝一夕ニ其事ヲ了スヘキニ非スト考ヘサルヲ得ス而テ條約改正ノ期限來中年五月中即西曆千八百七十二年第七月一日ヨリ其議ヲ始ムヘキ明

文アリ我政府此際ニ當テ此事アル頗ル盛業ヲ興スヘキ一大機會ヲ得タルモノト雖現場ノ形勢ニ由リ其事ヲ督促サレ順序及時限猶豫ナク切迫ニ及フトキハ亦困難ヲ受クルノ一大機會ニ當レリト云フヘシ如何トナレハ各國公使ニシテ此改正ノ議ヲ考案スルモノ各自其國ノ利益ヲ網羅セント目的シ我國ノ政俗公法ニ當ラサルヲ以テ却テ自恣ノ所志ヲ逞フスル爲メ正大公明ノ理ニ託シ制度法律教宗ヨリ百般ノ諸規則普通ノ公義ニ反セルヲ責メ定期ノ時限ヨリ直ニ普通ノ公法ヲ施行スヘシト請求スヘシ然ルニ事情急速行ヒ難キヲ以テ之ヲ拒辭スルトキハ必ス之ニ換フルノ請求ヲナシ終ニ威力ノ談判ニ涉リ其弊害ヲ招クモ量ルヘカラス故ニ姑息ノ改正ハ益國ノ權利ヲ失フ基トナル事未來ニ考ヘテ判然タリ此レ改正ノ機會困難ヲ受クルノ憂アリトスル所以ナリ故ニ此困難ヲ受クヘキ機會ヲ轉シテ盛業ヲ起スヘキ機會トスルハ樞機ノ一轉間ニ在リテ其關係特ニ全權ノ使節ヲ各國ヘ差遣シ一ハ我政體更新ニ由テ更ニ和親ヲ篤クスル爲メ聘問ノ禮ヲ修メ一ハ條約改正ニヨリ我政府ノ目的ト期望スル所トヲ各國政府ニ報告商議スルニ在リ此報告ト商議ハ彼ヨリ論セントスル事件ヲ我ヨリ先發シ彼ヨリ求ムル所ヲ我ヨリ彼ニ求

ムル所以ナレハ議論モ伸ル處アリ必ス我論說ヲ至當ナル事トシ之ニ同意シ相當ノ目的ト考案トヲ與フヘシ其目的ト考案ヲ採リ商量合議セハ其事ヲ實地ニ施行スル時限ヲ大凡三の延フルノ談判ヲ整ヘ了ルモ至難ノ事ニアラサルヘシ此ノ報告ト商議ハ列國公法ニ據ルヘキ改革ノ旨向ヲ報告シ且之ヲ商議シ實地ニ之ヲ我國ニ施行スルヲ要義トスルニ由リ其實效ヲ驗知スル爲メ歐亞諸州開化最盛ノ國體諸法律諸規則等實務ニ處シテ妨ケナキヤヲ親見シ其公法然ルヘキ方法ヲ採リ之ヲ我國民ニ施設スル方略ヲ目的トスル亦緊要ノ事務トス故ニ全權ノ使節ハ全權理事ノ官員何人ヲ附從シ之ニ書記官通辦官ヲ附屬セシメ右全權理事官員ハ之ヲ各課ニ分チ各其主任ノ事務ヲ擔當スヘシ乃チ

第一課制度法律ノ理論ト其實際ニ行ハル、所トヲ研究シ外國事務局、議事院、裁判所、會計局等ノ體裁ト現ニ其事務ヲ行フ景況トヲ親見シ之ヲ我國ニ採用シテ施設スヘキ目的ヲ立ツヘシ

第二課理財會計ニ關係スル法則、租稅法、國債、紙幣、官民爲替、火災、海上、盜難受合等ヨリ貿易、工作、汽車、電線、郵便ノ諸會社、金銀鑄造所、諸工作場等方法

規則ヲ研究シ及其體裁ト現ニ行ハル、景況トヲ親見シ之ヲ我國ニ採用シテ施行スヘキ目的ヲ立ツヘシ

第三課各國教育ノ諸規則乃チ國民教育ノ方法、官民ノ學校取建方、費用、集合ノ法、諸學科ノ順序、規則及等級ヲ與フル免狀ノ式等ヲ研究シ官民學校、貿易學校、諸藝術學校、病院、育幼院等ノ體裁及現ニ行ハル、景況トヲ親見シ之ヲ我國ニ採用シテ施設スヘキ方法ヲ目的トスヘシ

全權ノ使節及全權理事ノ官員ハ各主任ノ外我國ノ有益トナルヘキ事ハ凡テ之ヲ研究熟覽スヘキハ勿論ナレハ海陸軍ノ法律及給料ノ多寡之ヲ指揮スル方法ヲ研究シ各國有名ノ港津ニ至リ海關ノ實況、軍器庫、海軍局、造船所、兵卒屯所、城堡、海陸軍學校、製鐵所等ヲ親見シ且教習ノ所由ハ最モ緊要ノ監察ナリト注意スヘシ而テ附屬ノ書記官ハ其研究スル所ト親見スル所トヲ精細ニ記錄シ之ヲ採用シテ施設スルニ易カラシムルヲ要トスヘシ

右全權使節ヲ各國ヘ差遣スル大略ナリ其委任ノ章程及各國ヘノ公書全權理事官ノ職務章程各官員等級職權ノ際限等ハ其一行ニ係ル官員能ク其便宜ヲ量リ之ヲ考定シテ決裁ヲ乞

此レ人員ノ大略ナリ而テ使節ニ附從スル一等書記官ハ全權理事官ト同等ナルヘシ二等書記官ハ理事官一等書記官ヨリ上席タルヘシ

使節附從ノ通辦官ハ一等ハ二等書記官ト同等二等ハ理事官一等書記官ト同等ナルヲ要ス

我政府ニ於テ定約ノ年限ニ由リ來申年五月中即西曆千八百七十二年第七月一日ヨリ條約及稅則ヲ改正スルノ議ニ及ハントスルニ由リ爰ニ其改正スルノ目的ト期望スル旨趣トヲ明白ニシ且精細ナル陳述ヲナシ其實毫モ修飾ナク備サニ之ヲ各和親ノ列國ニ報告シ允當ノ考案ニヨリ公平ノ照會ヲナシ各政府ノ信從ヲ得テ其事業ヲシテ目的ト期望スル所ニ違ハス能ク成功ヲ奏スル事アルニ至ラシムルハ我政府及人民ニ關係スル所最モ重大ニシテ且緊要ナル事トス

各政府ニ於テ其目的ト期望スル所トヲ信シ且之ヲ公平ノ條理トシテ其事業ヲ贊成スル有ルニ至テハ和親ノ誼益厚ク貿易ノ利彌洪ク我政府及人民ノ獨リ幸ヲ享ルノミナラス各國相互ニ往來交通スル人民モ亦其益ヲ得ル基礎トモナルヘキ所以ナレハ各政府ニ於テ必ス我政府ノ說ヲ信聽シ更ニ遠慮

ヒ可ナルヘシ

其使節一行ノ人員ハ別紙ニ附ス

○別紙

欽差全權使節一行人員

欽差全權使節 一員

同 二等使節 一員

一等書記官 一員

二等書記官 二員

二等書記官ハ會計ヲ專任スヘシ

一等通辦官 一員

二等通辦官 一員

○

全權理事官 六員

一等書記官 三員

二等書記官 三員

此書記官中通辦ヲ能スルモノ三人ヲ要スヘシ

通辦官 三員

此外洋學生徒ノ通辦スル者アラハ四五人ヲ附從セシムルモ亦可ナリ

フ其間ニ容ル事ナキハ今ヨリコレヲ豫期セリ

凡事物上ノ實理ヲ推究スルニ輕重比較ノ力平均ヲ得サレハ權衡其準ヲ得ヘカラス苟モ其平準ヲ得サレハ昂低偏傾シテ權衡其則ヲ失フ今國ト國ト實際人ト人ト和親對等並立其當ヲ得サレハ猶權衡ノ平直ヲ失フカ如シ實際和親豈能ク平均ノ道ヲ得ンヤ今我政府平均ノ道ヲ得テ實際和親ノ誼ヲ厚クシ永續保全ナラシメントスル勉テ平均ナラシムルノ變革改正ヲ爲サ、ル可ラス既ニ此ノ變革改正ヲナサントスル其原因ヲ推究シ其平均ヲ得サルノ道理ヲ反顧セサル可ラス今之ヲ反顧スルニ東洋諸國西洋列國各其國體政俗ヲ異ニスルハ更ニ縷說ヲ俟タス此レ其國民開化ノ遲速ニ關係ストイヘトモ久慣ノ習俗因襲シテ永ク一種ノ政俗ヲナシ列國公法モ之ヲ規準スル能ハス我帝國日本政府各國ト條約ヲ結ビシ始メ國內人心開港ヲ好マサルニ由リ各種ノ難事ヲ生シ列國公法ニ從フ能ハサルヲ以テ各國ノ定約ヲ結ヒ和親ノ誼貿易ノ利ヲ通スルモノ一般ノ公義ヲ遂ケ普通ノ公權ヲ盡ス能ハサルヨリ自ラ別派ノ處置ヲ設ケサルヲ得サルノ勢ニ至リ彼此一致ノ通義ヲ失ヒ實際貿易上ノ權利終ニ平均ヲ得サルノ憂ヲ生セリ

既ニ反顧シテ平均ヲ得サルノ理ヲ推究スレハ我國體政俗ノ異ナルヨリ列國公法ヲ以テ他邦ヲ待シ普通ノ公義ト公權トヲ以テ他民ヲ處スル能ハサルヨリ此ノ如キ不平均ヲ生セシ所以ニシテ之ヲ正理ニ照シテ不當ノ事ト認ルトキハ勉強シテ平均ナラシムルノ方略ヲ考究シ其國體政俗ヲ變革改正セサルヘカラス今我帝國日本 天皇陛下及政府政權統一以來夙ニ各國交際貿易ノ道彼此平均ニ至ルヲ期望シ其理勢變革改正セサルヘカラス事ヲ了知シ積世因襲ノ陋規弊習ヲ洗滌シ大ニ開國ノ規模ヲ期希スル爲メ封建ノ治體ヲ變シテ郡縣トシ拘束セシ民權ヲ復シテ簡易ニ歸セシメ百事更正スル所アリテ國民ノ景況之ヲ前日ニ比スレハ大ニ觀ヲ改ムルニ至ルト雖其事ヲ設爲施行スル未タ其歲月淺キニヨリ尙變革改正ノ順次逐件ナスヘキモノ有リ此ノ條件盡ク改正スルヲ得テ始テ我政府ノ目的ヲ達シ期望スル所ヲ逐ルト云ヘシ乃チ其條件左ノ如シ

第一我國律中、民律、貿易律、刑法律等殊ニ西洋各國ノ法律ト大ニ殊ナルヲ以テ何ノ人民モ之ヲ遵守シテ妨礙ナカラシムヘキ目的ヲ定メ其異ナルヲ除キ其同キヲ採リ正理ニ適合シテ謬リナカラシムヘキコト

意シ我國ヲシテ開化ノ域ニ登進セシムル事ニ協力シ厚ク商議ヲナシ其處置ヲ十分施行シ得ヘカラスムヘシ而テ其處置ヲ十分施行シ得ヘカラスムニハ其期限ヲ豫算シテ我政府ニ與ヘカラス此レ我政府大ニ後ニ期スル處アルニヨリ其事情ヲ陳述シテ條約改正ノ期ヲ延フルノ請求ヲ敢テ各國政府ニナスモ亦不レ得レ巳ノ所以ナリ

(岩倉公實記)

註

「岩倉公實記」ニハ本號文書直前ニ「初メ九月三條實美勅ヲ奉シ特命全權大使ヲ歐米各國ニ派遣スヘキ事由書ニ通フ具視ニ下シ以テ意見ヲ詢フ」ノ記載アリ尙本號文書日附ヲ缺クヲ以テ假ニ九月十五日トセリ

#### 四三

明治四年九月十五日 岩倉外務卿等ヨリ  
西曆一八七三年十月十八日 太政官正院宛

#### 使節派遣並ニ改正延期年限ニ關シ答申ノ件

條約改定延期斷之爲使節可レ被差立ニ起原ノ條理件々御下問ノ書中固ヨリ異議無レ之早々人員御撰舉發程ノ準備被ニ仰出ニ度存候但三年定限立候儀ハ將來之景況ニ由リ萬一失見モ有レ之候ハ、指支候ニ付先使節一行歸國我政府熟議ヲ遂候上右期限更ニ可ニ申入ニ方可レ然歟且學校兵學宗教等ニ至

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 四三 四四

第二各國人民相互ニ相往來居住スル其國法ヲ遵奉スルニ於テハ固ヨリ自由ヲ得ヘキ事アリ然ルニ地ヲ盡シテ其區ヲ分ツ彼此一致セサルニ似タリ故ニ往來住居ノ規則ヲ確定シ自由ヲ得セシムヘキ方法ヲ設クルコト

第三國東西ヲ異ニシ民情亦隨テ均シカラスト雖其原性元ヨリ同一ニシテ異ルコト有ルナシ故ニ教諭ノ道ヲ盛ニシ開化ノ歸旨ヲ一致セシムル方法ノコト

第四彼此法教ノ存スル障害ハ之ヲ除キ異論ナカラシムルノ實徵ヲ保全シ相互ニ抵觸ナカラシムヘキコト

右ノ條件變革改正スルニ於テ國內百般ノ事務之ニ準シテ更正セサルヘカラス而テ或ハ施爲先後ノ順序アルモノアリ或ハ方法處置ノ趣向ヲ案定シテ商議ニ附スヘキモノ有リ而テ之ヲ實際ニ施行スル多少ノ時限ヲ費サ、ルヲ得サルモノ有リ或ハ其法令ノ行レサルカ又ハ之ヲ拒ムノ徒アルトキハ威力ヲ以テ之ヲ壓制シ其事ヲ遂クヘキモノ有リ

此變革改正ヲ行フハ一大事件ナルニ由リ緊要ナル商議ヲ各邦ニナシ其考案論稅ヲ請フハ必要ノ事ト考ヘタリ

各國政府ニ於テ我國政府ノ目的ト期望スル所トヲ贊成スル爲メ要用ナル考案ヲ與ヘ且其論說ヲ聽カシメ以テ此事ニ同

ルマテ同時研究之趣相見候ヘ共右ハ條約改定ノ急務ニ無レ之其中法律理財交際ノ三科丈ケ急務ニ有レ之候間使節一行中ニテ研究可レ致儀ト存候外ニ償金一條ハ猶取調更ニ相同可レ申候此段申上候以上

辛未九月十五日

山口外務少輔  
寺島外務大輔  
岩倉外務卿

正院 御中

追而本文學校兵學宗教等ノ儀云々ノ次第ハ全ク職掌ニテ申入候ヘ共此儀ハ別段見込可ニ申上候尙又使節人員何分ニモ速ニ御取極有レ之度存候也

(岩倉公實記)

#### 四四

明治四年十月四日  
西曆一八七三年十月十六日

佛國公使歸國ニ際シ條約改正使節派遣ニ關シ賜ハリ

タル勅語並ニ佛國公使ノ言上振

山里離宮ニテ

佛國公使江

勅 語

我邦政體一新シ外交ノ誼モ亦日ヲ逐テ親密ナリ依テ各國政府江聘問ノ禮ヲ修メ交際ノ情誼益敦カラシメン爲メ特ニ重臣ヲ各國江派出シ其禮ヲ修メントス然ルニ各國ト取結タル條約改定ノ期既ニ近キニアリ我内地ノ改正大ニ之ニ關係スルヲ以テ併テ其事ヲ商議セシメントス幸ニ汝ニ托シテ朕カ意ヲ大統領ニ傳ヘ使臣等述ル所ノ意ヲシテ達セシメヨ汝今國ニ歸ル朕偏ニ祈ル遠洋萬里恙ナク渡航セン事ヲ

佛國公使

山里離宮ニテ内謁見之節

御 請

陛下ノ特命全權大使ヲ各國ヘ發出シ給フノ由急ニ我國政府ヘ通達致ベク其人選ノ精ハシキ英才ヲ用ヒ給ヘハ必ス歡慮ヲ布達シテ殘ス事ナク然シテ我カ大統領ヲシテ是ヲ悅領セシメン事疑ヒナシ

小臣歸國セハ

陛下ノ今 宣言シ玉ヒシ條約改定ノ事ニ付 歡慮ノ趣委細ニ其筋ニ申入り使節ト我政府トノ間ニテ取扱ヘキ事情ヲ預

況御中立にも相成候は、我使節談判の趣の證左とも相成多少都合宜かるべくと存候既に英國日耳曼公使も歸國中に有之佛國公使も不日歸國可被致由何れも使節差遣候節の便宜可相成と存候事に付貴國にも右同様閣下御在都の時を得候は、無此上好機會に存候右御様子伺度如此御座候以上

年 月 日

卿 御 一 名

デロング閣下

註 本號文書ニヨレバ同文意ノ書翰佛國公使ヘモ達セラレシモノ、如キモ見當ラス

四六

明治四年十月八日 太政官式部寮ヨリ  
西曆一八七二年二月二十日 外務省宛

外務卿岩倉具視右大臣ニ任命ノ旨通知ノ件

外務卿 岩 倉 具 視

任右大臣

右本日

宣下相成候條此旨相達候也

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 四六

シメ申達シテ其時ニ方ツテ辦理容易ナラシムル様取計フベシ  
貴國ニ於テ内地ノ改正及開化進歩ヲ速ニセンカ爲メ此使節ヲ發スル事至要ナルヘク我國政府ニ於テモ其關係ナシトスベカラズ爰ニ再ヒ内謁ヲ賜ヒシ其恩榮ノ隆渥ナル外臣實ニ其當ニ非ス

註

右ハ十月四日佛國公使解任狀捧呈ノ爲參朝謁見ノ後更ニ山里離宮ニ於テ内謁見ヲ賜ハリタル際ノモノナリ

四五

明治四年十月四日 岩倉外務卿ヨリ  
西曆一八七二年十月十六日 米國公使宛

使節歐米御差遣ニ付斡旋方ニ關スル件

十月四日達す

以手紙致啓上候然ハ過日御面晤の節御内話及置候通我天皇陛下おゐて貴國をはしめ歐洲結盟各國エ聘問之使節被差遣一新以來我政府懇親の真情道説および現今將來交際の着眼無伏藏談判相及度折柄閣下御歸國の免許貴政府より有之候哉傳聞いたし候彌左様に候は、我使節貴國都府到着の御閣下にも御在都にて我國近來の政體時勢閣下御見聞の實

辛未十月八日

式 部 寮

外務省御中

二

歐米派遣特命全權大使以下任命ノ旨通知ノ件

右 大 臣 岩 倉 具 視

特命全權大使トシテ歐米各國ヘ被差遣候事

參 議 木 戸 孝 允

大 藏 卿 大 久 保 利 通

工 部 大 輔 伊 藤 博 文

外 務 少 輔 山 口 尙 芳

特命全權副使トシテ歐米各國ヘ被差遣候事

外 務 少 丞 田 邊 太 一

外 務 大 記 鹽 田 篤 信

福 地 源 一 郎

今般特命全權大使歐米各國ヘ被差遣候ニ付一等書記官トシテ隨行被仰付候事

外 務 大 記 柴 田 昌 吉

外務少記 渡邊 洪基

川路簡堂

小松 濟治

今般特命全權大使歐米各國江被差遣候ニ付二等書記官トシテ隨行被仰付事

右之通本日御沙汰相成候條此旨相達候也

辛未十月八日

式部 寮

外務省 御中

#### 四七

明治四年十月十四日  
西曆一八七五年十一月十六日  
寺島外務大輔ヨリ  
各國公使、露國外務卿宛  
花房外務大記ヨリ  
橫濱在勤瑞西國總領事宛

和親聘問竝ニ條約改正準備ノ爲特命全權大使岩倉具視以下ヲ歐米ニ差遣ノ旨通告ノ件

露八十三日付

辛未十月九日米佛兩公使ヘ達ス 其他ハ總テ十四日附

以手紙致啓上候然我

天皇陛下即位以來和親ノ各國ニ未タ聘問ノ禮ヲ修メザルヲ

以上

明治四年辛未十月

外務大輔 寺島 宗則

米英伊白佛澳蘭西各公使

獨瑞典丁抹ヘハ代任公使

葡ハ瑪港在留公使 魯ハ本國政府ヘ

末文

大旨ナレハ前以此ヲ閣下ニ報知致シ候此段可得御意如此御座候以上

年月日

大輔 御名

魯西亞國外務卿閣下

末文

貴下能ク此意ヲ允諾シ貴國政府ヘ御通報有之度尤大使一行人員回歷ノ順次并開帆日限等ハ追テ可申進候右外務大輔之命ニ依リ可得御意如此御座候以上

年月日

外務 大少丞 花房

瑞西總領事

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 四八

以テ右大臣岩倉具視ヲ特命全權大使トシ參議木戸孝允大藏卿大久保利通工部大輔伊藤博文外務少輔山口尙芳ヲ特命全權副使トシ締盟ノ各國ニ派出シ聘問ノ禮ヲ修メ益々兩國親好ノ情誼ヲ厚クセント欲ス然シテ貴國ト取結タル條約改定ノ期限近キニ在ルヲ以テ右使臣派出ノ便ニ由リ併セテ我政府ノ目的期望スル旨ヲ貴國政府ニ陳述シテ其考案ヲ乞ントス抑我政府ノ目的期望スル主旨ハ各國和親ノ實際ヲ敦篤ニシ永世保續セシメントスルニ在リ而シテ之ヲ保續セシメントスルニハ開化ノ國々ニ行ハル諸方法ヲ則リ内地ノ改革ヲ盡シテ同一致ニ歸セシメサルヘカラス之ヲ同一致ニ歸セントスル我政府ノ腹心ヲ披陳シ締盟各國政府ノ考案ヲ諮詢シ其方法ヲ實地ニ試驗習學セシメ適宜允當ナルヲ採テ之ヲ我國ニ舉行スル基礎ヲ圖ントス故ニ我大使歸國ノ後其實踐目標撃スル處ト締盟各國政府ノ考案スル處トヲ審考シ然ル後條約改定ノ議ニ及ハントスサレハ其間費ス所ノ年限ヲ延ルハ已ヲ得サルノ請求ニテ又之ヲ締盟各國政府ニ要セサルヲ得ス此レ今般大使ヲ派出スル大旨ナリ閣下能ク此意ヲ允諾シ貴國政府ヘ通報シ懇切ノ周旋ヲ望ミ候尤大使一行人員回歷ノ順次竝開帆日限等ハ追テ可申進候右可得貴意如斯御座候

シブレンワルト貴下

註 本號文書ノ中露國外務卿宛ノ分ハ十月十三日附川邊外務少丞ヨリ函館在勤露國領事宛書翰ヲ以テ又白國公使瑪港在留葡國公使宛ノ分ハ十月十四日附花房外務大記ヨリ橫濱在勤白國領事、同葡國領事宛書翰ヲ以テ夫々送達セラレ居レリ

明治四年十月十四日  
西曆一八七五年十一月十六日  
岩倉大使ヨリ  
英國公使（歸國中）宛

#### 四八

特命全權大使拜命締盟各國ヲ訪問スヘキニ付渡英ノ節種々周旋ニ預リ度旨依頼ノ件

未十月十四日英國公使館附達ス

以手紙致啓上候然者拙者儀今般右大臣ヲ以テ特命全權大使被命締盟和親ノ各國ヘ聘問ノ爲メ發向致シ候ニ付別紙ノ通當地在留貴國代理公使ヘ御通達及候就テハ兼テ閣下御歸國前我

天皇陛下ヘ御陳上ノ趣モ有之候處逐條舊染ヲ改メ既ニ廢藩立縣ノ規模一定猶務メテ將來ノ鴻途ヲ開キ益交際ヲ盛大ニ致シ度使命ノ大旨專ラ此事ニ有之候閣下ニハ多年我國ニ御在留交際上ハ勿論一新ノ際不ト方御盡力被下一體ノ事柄

モ御諳熟ノ事即今御在國中ヲ幸ヒ別シテ好意ノ御周旋ニ預リ度企望此事ニ存候仍テ御心得迄ニ別紙寫相添此段及御委賴度可得貴意如此御座候以上

明治四年辛未十月十四日

岩倉具視

サアハルリーエスパークス閣下

註 本號文書ニ「別紙寫」トアルハ四七ト同文

#### 四九

明治四年十月十四日 岩倉大使ヨリ  
西曆一八七二年十二月 獨國代理公使（歸國中）宛

特命全權大使拜命締盟各國ヲ訪問スヘキニ付渡獨ノ節種々周旋ニ預リ度旨依頼ノ件

未十月十四日公使館附へ達す

以手紙致啓上候然者拙者義今般右大臣を以て特命全權大使被命締盟和親の各國へ聘問の爲致發向候に付別紙の通り當地在留貴國代任公使へ及御通達候閣下には御在留中交際上は勿論我國一新の際に當り不一方御配慮被下殊更御歸國前種々御懇話被下候段深感銘致候就ては此節御在國を幸ひ萬端好意の御周旋に預り度企望此事に存候仍て御心得迄別紙

寫相添此段及御委賴度可得御意如此御坐候以上  
四年十月十四日

岩倉公御名

エムホンブランド

註 本號文書ニ「別紙寫」トアルハ四八ト同文

#### 五〇

明治四年十月十五日 英國代理公使ヨリ  
西曆一八七二年十二月 寺島外務大輔宛

岩倉大使以下御差遣ノ通知了承ノ旨回答ノ件

昨日附之貴翰致披見候然者今般

天皇陛下に於て右大臣岩倉具視を特命全權大使とし參議木戸孝允大藏卿大久保利保工部大輔伊藤博文外務少輔山口尚芳を特命全權副使とし締盟之各國に派出し倍兩國親好之情誼を厚し且彌期限に臨候條約改定之儀に付貴政府之目的希望之旨を各國政府へ陳述せん爲被差遣右今般派出する大旨に付我本國と貴政府と條約改定日限之儀者大使歸國迄延引被致度趣致承知早速我

皇帝陛下之政府へ貴簡之寫を以通達可致候得は於我政府締盟之各國へ高貴之使節被遣候

天皇陛下之御趣意十分に諒察可致事不容疑所に候且貴政府に於て改定之日限延引被致度請求之儀來論に應し本國政府へ相伺可申候右回答迄如此御座候以上  
十月十五日

英國代理公使

ヘン、オ、アダムス

寺島外務大輔閣下

（右原文）

Yedo, November 27, 1871.

Sir,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's note of the 26th Instant informing me that the Udaïjin Iwakura Tomomi has been appointed by His Majesty the Tennô Chief Ambassador Extraordinary Plenipotentiary, and the Councillor of State Kido Takasuké, the Minister of Finance Okubô Toshimichi, the Vice Minister of Works Ito Hirobumi, and the Assistant Vice Minister for Foreign Affairs Yamaguchi Nawoyoshi Vice Ambassadors Extraordinary Plenipotentiary to be sent on a special mission to all the States which

are in alliance with Japan, in order to cement more closely the friendly and amicable relations which exist between them and Japan, and to explain the views and wishes of the Japanese Government with reference to the approaching revision of treaties.

Such being the object of this special Embassy, your Government are desirous that the term fixed for the revision of the Treaty between Great Britain and Japan should be put off until after the return of the Embassy to this country.

I have the honour to inform Your Excellency in reply that I will lose no time in communicating a copy of your note to Her Majesty's Government, who, I cannot doubt, will fully appreciate the resolution of His Majesty the Tennô to send this distinguished Embassy to Great Britain and to the other States which are the allies of Japan, and I will submit to the favourable consideration of Her Majesty's Government the desire of the Japanese Government to postpone the date of the revision of the Treaty, as requested by Your Excellency's note. I avail myself of this opportunity to renew to

Your Excellency the assurance of my highest consideration.

F. O. ADAMS,  
H. B. M.'s Chargé d'Affaires  
in Japan.

His Excellency  
Terashima Munenori,  
etc., etc., etc.,

註 三三ニ對スル葡萄牙國公使(十一月二十四日附、發信地瑪港)ノ瑞西國總領事(十月二十三日附、發信地東京)ヨリノ返翰ハ右英國公使返翰ト同文意ニ付省略ス尙前記以外ノ各國ヨリノ返翰見當ラス

五一 明治四年月二十二日 太政官式部寮ヨリ  
西曆一八七一年十二月四日 外務省宛

歐米派遣理事官以下任命ノ旨通知ノ件

附記 十月二十三日以後ノ大使隨行者異動ニ關スル辭令

陸軍少將 山田顯義  
侍從長 東久世通禧  
戶籍頭 田中光顯  
文部大丞 田中不二麿

理事官トシテ歐米各國へ被差遣候事

外務大記 野村 靖  
式部 助五辻安伸  
神奈川縣大參事 内海忠勝  
兵庫縣權知事 中山信彬

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事  
兵學大教授 原田一道

今般山田陸軍少將理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事

宮内大丞 村田經滿

今般東久世侍從長歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事  
戶籍頭 田中光顯

特命全權大使會計兼務被仰付候事

租稅權助 若山儀一  
阿部 潜

今般田中戶籍頭爲理事官歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事

檢查大屬 杉山一成  
租稅權大屬 富田命保

同斷申付候事

文部中教授 長與秉繼  
正七位 中島永元

今般田中文部大丞理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事

文部中助教 近藤昌綱  
文部中助教 今村和郎  
内村良藏

同斷申付候事

文部大助教 池田政懋  
外務大錄 安藤忠經

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付四等書記官トシテ隨行被仰付候事

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商義 五一

理事官トシテ歐米各國へ被差遣候事

外務大記 野村 靖  
式部 助五辻安伸  
神奈川縣大參事 内海忠勝  
兵庫縣權知事 中山信彬

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事  
兵學大教授 原田一道

今般山田陸軍少將理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事

宮内大丞 村田經滿

今般東久世侍從長歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事  
戶籍頭 田中光顯

特命全權大使會計兼務被仰付候事

租稅權助 若山儀一  
阿部 潜

魯國留學被仰付候事  
正四位 清水谷公考  
司法大輔 佐々木高行

理事官トシテ歐米各國へ被差遣候事

少判事 平賀義質  
同 岡内重俊  
同 中野健明  
長野文炳

今般佐々木司法大輔理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被仰付候事

右之通本日御沙汰相成候條此旨相達候也

式部 寮

外務省 御中

註 岩倉大使隨行ノ書記官、理事官以下ノ其ノ後ノ異動ニ關シテハ記錄不備ナルヲ免レス依テ十月二十三日以後ノ發令ニシテ記錄中ニ存スルモノノミヲ左ニ一括附記シ後考ニ備フ

附記一

造船頭 肥田爲良

理事官トシテ歐米各國へ被差遣候事

鐵道中 屬 瓜 生 震

今般肥田造船頭理事官トシテ歐米各國へ被差遣候に付隨行  
申付候事

林 董 二 郎

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付二等書記官トシ  
テ隨行被 仰付候事

川 路 簡 堂

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付三等書記官トシ  
テ隨行被 仰付候事

右ノ通御沙汰相成候條此段申入候且川路簡堂へ去八日御達  
ノ分御取消ニ相成リ更ニ本文ノ通被 仰付候此段モ爲御心  
得申入候也

辛未十月廿三日

式 部 寮

外 務 省 御 中

從五位毛利元敏儀一千日ノ間英國龍動ニ留學ノ儀願ノ通被  
聞届候條此段申入候也

今般佐々木司法大輔理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付  
自費ヲ以隨行願ノ通被 聞食届候事

今(一)

辛未十月二日

太 政 官

租稅權頭 安 場 保 和

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被

仰付候事

右ノ通本日

宣下相成候條此旨相達候也

辛未十一月三日

式 部 寮

外 務 省 御 中

鑛山助 大 島 高 任

今般肥田造船頭爲理事官歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被

仰付候事

右ノ通本日

御沙汰相成候條此旨相達候也

辛未十一月四日

辛未十月廿四日

史 官

外 務 省 御 中

沖 守 固

今般田中戸籍頭爲理事官歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被  
仰付候事

右本日

宣下相成候條此旨相達候也

辛未十月廿五日

式 部 寮

外 務 省 御 中

從四位 前 田 利 嗣

英國留學被 仰付候事

右本日

宣下相成候條此旨相達候也

辛未十月廿九日

式 部 寮

外 務 省 御 中

從五位 鳥 居 忠 文

式 部 寮

外 務 省 御 中

山内六三郎

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付三等書記官トシ  
テ隨行被 仰付候事

日 下 義 雄

米國留學申付候事

佐々谷八郎

今般田中戸籍頭理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行

申付候事

右ノ通御沙汰相成候條此旨相達候也

辛未十一月四日

式 部 寮

外 務 省 御 中

少 議 官 高 崎 豐 麿

理事官トシテ歐米各國へ被差遣候事

權少外史 久 米 丈 市

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付隨行被

仰付候事

少 議 生 安 川 繁 成

今般高崎少議官爲理事官歐米各國へ被差遣候ニ付隨行申付候事

右本日

御沙汰相成候條此旨相達候也

辛未十一月五日

式 部 寮

外務省御中

佐々谷八郎

右今般理事官爲隨從外國行被 仰付候旨申入候處御沙汰止ニ相成候條此旨相達候也

辛未十一月七日

式 部 寮

外務省御中

長野桂次郎

今般特命全權大使歐米各國へ被差遣候ニ付二等書記官トシテ隨行被

仰付候事

右ノ通御沙汰相成候條此旨相達候也

山本復一郎

右ハ家扶ニ御座候所此度召連候事

山口林之助

右ハ家從ニ御坐候所此度召連米國ニユルクエ留學爲致候事

松 方 介

右ハ鹿兒嶋縣士族ノ所此度隨從トシテ召連候事

日 置 兵 市

右ハ宇和嶋縣士族ノ所此度隨從トシテ召連候事

福 井 順 三

右ハ木戸參議家從ノ所此度隨從トシテ召連候事

高 辻 修 長

右ハ辭職ノ上自費ヲ以テ隨行願ノ通り被 聞食候ニ付同航致候事

香 川 廣 安

前同斷ノ事

右ノ通御届申候也

十一月五日

岩倉右大臣

未十一月八日

式 部 寮

外務省御中

山内六三郎

特命全權大使隨行三等書記官被免候事

辛未十一月八日

太 政 官

吉 雄 永 昌

今般田中戸籍頭理事官トシテ歐米各國へ被差遣候ニ付隨行申付候事

右本日

御沙汰相成候條此旨相達候也

辛未十一月十日

式 部 寮

外務省御中

附記二

今般使節ニ付隨行人名左ノ通

岩 倉 具 綱

右ハ嫡子ノ所此度隨從トシテ召連候事

外務省御中

附記三

外務少丞宮本小一郎、外務省出仕大原重實ヲ特命全權大使御用取扱掛ニ任命セル旨回答ノ件

特命全權大使御用取扱掛りの者省よりも人撰の上名前今日中可申立候様御達の趣承知致し候則宮本少丞大原重實等え申付候間此段御答申候也

辛未十一月廿二日

副島外務卿

土方大内史殿

猶以御端書の趣承知致し候也

附記四

岩倉大使ニ隨行スヘキ文部省所管人員名簿送付ノ件

此書類寫は田邊少丞持越す

何分混擾中大に遅引致し候則別紙御廻し申候間御落手有之度也

未十一月九日

文 部 省

外務省御中

(名簿)

昨今免狀相渡シ出帆<sup>(可)</sup>不致分左之通

從四位 黒田長知  
福岡縣士族 金子堅太郎  
同 團 琢 磨  
從五位 伊達宗敦  
正四位 鍋島直大  
山口縣士族 河内宗一  
高知縣士族 中江篤介  
從五位 毛利元敏  
清水谷公考  
米澤縣士族 平田範靜  
岡山縣士族 松田益次郎  
同 水谷六郎  
松崎從五位  
萬里小路 秀麿  
武者小路 實世  
富山舊知事 從四位 前田利同  
從五位 奥平昌邁  
從四位 坊城俊章

吉川重吉  
岩國縣貫屬 土屋靜軒  
田中貞吉  
從四位 前田利嗣  
山口縣貫屬 三浦男太郎  
金澤縣貫屬 堀嘉久馬  
同 澤田春松  
岩倉右大臣家從  
山口林之助  
從二位 蜂須賀茂韶  
上田外務中錄  
東京府貫屬 婚 悌  
金澤縣貫屬 關 澤 明 清  
同 中島精一

五二 明治四年十二月二日 寺島外務大輔ト  
西曆一八七一年十二月四日 蘭國辦理公使トノ對話書

岩倉大使ノ使命竝ニ條約改正ノ見込ニ關スル件

辛未十月廿二日於外務省寺島外務大輔荷蘭公使エフ

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商義 五二

鹿兒島縣貫屬 岩下長十郎  
吉益正雄  
東京府貫屬 娘 亮  
永井久太郎  
靜岡縣貫屬 娘 繁  
津田仙彌  
東京府貫屬 娘 梅  
山川與十郎  
青森縣貫屬 娘 捨松  
大久保利通嫡男  
大久保 彦之進  
大久保利通厄介  
牧野 伸熊  
大村縣貫屬 湯川賴次郎  
靜岡縣貫屬 川 村 勇  
從五位 鳥居忠文  
山口縣貫屬 日下義雄  
從五位 錦小路賴言  
大村縣貫屬 松浦 熙行

ペー、フアンドル、フーフエン應接記

大使被差遣候事に付彼國於て談判の模様

今般各國え御使節被差遣候旨御書翰を以て御報知有之其御主意は御尤に存候就ては條約再議御見込の个條は兼て本國政府へ申遣し置度殊に瑞典公使も任し居り同國於ては御國の事情も不相心得候間別て委敷申遣し度候過日の書翰面にて大主意は盡し居候其細目は御話し可申候或は遊歩規程は十里を限りと有之各國にては我國人参りていつれに住居しいつれに旅行候とも制限なし是は其取締の法立ち居る故に有之日本にはいま右様の取締規律も不立故に各國の風を見聞慣習致し第一是等の事を改革せずしては條約改定の詮なし依て此度各國巡廻致し其模様を熟覽の上にて改定の儀に及はんとする事に候御見込御尤に有之岩倉公の御出向に相成候は至極宜敷事に有之就ては同公より御引合可相成條々を伺置度候此度改定の談判に涉り候には無之其改定すへき趣意を相話し候事に候

先達て英獨兩公使え御話の事あり條約書は各國同一に被成候事哉

條約書は各國共其趣意は同じ唯今條に入違あるのみ夫故展開に煩し其替りには使節に來り候もの他國の條約と同様にては態々使節に來り候廉も立さる故に有之

同一に被成候には何國を御目的に被成候哉米國杯の條約は最初故宜しからず候

澳地利は新らしき故能く整ひ居候間是等に依りて可然候此度は其談判には不涉歸國後の事に候

さすれば再議にては無之候哉

素より再議の談判にては無之只各國にて舊來執行ひ來りて斯すれば差支なく行はるゝとの事等を慣習し各國の法を參考折衷して再議決定の基礎と致候義に有之

本國へ御越の節如何様の御談判被成候事哉只今御話し可相成程の个條無之ては再議に付て御出の詮なし其个條有之候は拙者心得居らず候ては本國政府への報知もいたし難く候

固より其个條あり其書面は四五日の内に各國へ可達先つ其一二を擧て申さは遊歩規程○燈明臺之稅○出入港之稅を廢止噸稅に可致米國にては輸出稅なくして輸入稅のみ夫故輸入稅高し各國は如何のものや彼は參考致いたし其適宜に因

り候事に候

都て開化の國法を手本と不被成候ては不相成米國は歐洲各國よりは若く候間手本とは不相成御國は往古より据り候て開化の御國故歐洲各國の如く往昔より連綿致居候國律を御學ひ被成候方宜敷候米國にて輸出稅を取らざるは產物を増殖いたし候策夫故物價不廉<sup>マダ</sup>先年南北戰爭も賣奴より起るとは申せとも其實は收稅并物價を貴く致さんとせしよりの事に候

米國のみを目的と致候には無之各國の法を參酌不致候ては不相成候

御使節え我政府より御談判申候廉は先つ條約書を各國同一に致候事并日本全國を御開き可相成事に候

全國を開くとの趣意は如何哉  
或は港を開きいづれえなりとも來航し船中にて交易を爲し何地へも旅行し相對にて勝手に取引いたし候事御國於て外國人を御國人同様に取扱候義は不相成各其領事の支配を受候事に有之領事は何地にても住居すると申事は不相成候間平人も同様勝手に移住は不相成只旅行を許し候迄に候

候也

十月廿七日

追て日限は御未定に候也

附屬書

特命全權大使歐米各國へ發遣ノ式次第

一當日早旦式部寮官員大廣間ヲ布設ス

一制限參議諸省卿二ノ間ニ候ス<sup>北面上西面</sup>

一次

出御大臣御帳臺ノ前ノ西ニ侍ス侍從長御後ノ左右ニ候ス

一次大臣式部寮官員ヲシテ大使副使ヲ召サシム

一次大使副使

玉坐ノ前ニ進ンテ瞻折ス

一次

御手自カラ國書大使ニ授玉フ大使之ヲ拜授了各退ク

<sup>(朱書)</sup>一次理事官以下隨從ノ官員進ンテ

天額ヲ拜ス

右一箇條可加入歟

一次

入御

是迄の條約外國人は日本役人の立合なくして取引すへしとあれとも諸藩の人取引する事に付先比各公使え御相談有之拙者には少々御不同意の廉も御座候  
是迄諸藩にて外國人より借金いたし返済方に難儀いたし候もの多く此仕法を條約面に書載いたし度候  
何國の貨幣にても拂方に差支なき様いたし大坂造幣寮の規則も書載いたし度  
米穀輸出の事は外國人にはさのみ要ならず御國の利潤に有之候

五三

明治四年月二十七日 坊城式部頭ヨリ  
西曆一八七一年十二月九日 岩倉大使宛

特命全權大使發遣式ニ關シ打合ノ件

附屬書 右式次第案

右大臣殿

俊政

今度歐米各國へ使節御差立に付別紙次第の通於大廣間御對面嚴重に御取扱の方可然歟と存候に付遣唐使に節刀を賜候舊儀に依り取調差出候處一應貴殿へ御打合せ可申上相公被命候尤朱書の分も加入の方然可と相公御命候此段早々申入

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商義 五三

一了テ各退散

註 本號文書ニ對シ十月二十八日附書翰ヲ以テ岩倉大使ヨリ坊城式部頭宛テ承ノ旨回答シ居レリ

五四 明治四年十月二十七日 岩倉大使等ヨリ  
西曆八七年十二月九日 大久保大藏卿等宛

條約改正談判ノ爲改正希望ノ税目及理由早々調査アリ度旨依頼ノ件

明治四年辛未十月廿七日達濟

今般歐米各國ニ罷越條約改正の議に論及いたし候節自然税目税則の事に涉り可申輸出入税額増減の義に付ては兼て大藏省の御見込も可有之筈に候間左の條々早々御取調の上三四日中に御書面御報告可有之候

一某品某品の輸入税を現今實際の税目より可増候哉或は可減候歟

一某品某品の輸出税も同様現今の税額より可減歟或は可増歟

一右の増減をなすべきは何等の條理何等の利害を謀りて之を行はざるを得ずと云事の説明を一々御書加可有之候事

調ノ儀ハ來ル五日限り取調差上可申ト奉存候此段申上候也

大藏少輔 吉田 清 成  
大藏大輔 井 上 馨

正院 御 中

註 本號文書ノ日附竝ニ本號文書太政官ヨリ廻送ノ日附明ラカナラス依テ假ニ十一月一日トセリ

附屬書一

内國租稅改正見込書

夫皇國ノ税法ニ於ケル往古ハ兵農不分賦征無別中古ニ至リ政權武門ニ移リ封建ノ制行レシヨリ兵農全ク分レ比隣法ヲ異ニシ農民特リ重歛ニ苦シム事久シ今ヤ

皇威煥發郡縣ノ體裁ニ歸シ百政齊一ノ際經國ノ樞機理財會計ノ基本タル税法ヲ更張セサルヘカラス抑租稅ハ人民保護ノ要務タレハ之ヲ出サシムルヤ上下均一貧富公平ヲ旨トス而シテ税法ヲ施設スルニ當ツテヤ特リ地ニ耕ヤシ力ヲ勞スル者ニ課スルニ非スシテ物品ヲ費ス者ヨリ出サシメ有用品ニ薄クシ無用品ニ重クスルヲ以テ普通ノ公理トス然リト雖モ從來田租ヲ主トシ五公五民坪取ノ法ノ如キ今俄ニ之ヲ廢セントセハ因襲ノ久シキ既ニ人心ニ固結シ一時ニ釐革シカ

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商義 五五

此税目改正の義は條約改正中の重大の廉に候間大藏省即ち其責任に當り候右に付實際の得失を付度して御取調有之候様被存候右得御意度如此候也

岩倉右大臣  
木戸 參 議  
大久保 大藏卿  
伊藤工部大輔  
山口外務少輔

大藏卿 輔 殿

五五 明治四年二月一具(傳) 井上大藏大輔等ヨリ  
西曆八七年三月十二日 太政官正院宛

租稅及關稅ノ改正竝ニ輸出入ノ利害ニ關スル意見書送付ノ件

附屬書一 内國租稅改正見込書

二 租稅及關稅ノ改正竝ニ輸出入ノ利害ニ關スル說明書

今般内國稅法及海關稅更正ノ見込并渡來ノ利害得失等參考熟議致シ可申上旨御垂問ニ付見込ノ趣別紙兩通取調差上申候且又近々特 命專使歐米出帆ニ付各港輸出入物品稅明細

タシ故ニ先ツ地所賣買ノ禁ヲ解キ地券ヲ改メ而テ沽券ノ稅法ヲ施設シ或ハ物品稅印等ヲ起シ其實舉ルニ從テ一般土地ノ稅ヲ薄クシ以テ生産ノ増殖ヲ勸メ或ハ專賣特許ノ稅ヲ設以テ人ノ智識ヲ開キ百工ヲ獎勵シ以テ人工品ノ増殖ヲ誘導スル<sup>(原註時款)</sup>則ハ内地ノ物品繁殖シテ國用以テ豐足スヘシ加之全國ノ地宜ニ應スル物產ヲ育シ邦俗ニ適スル工藝ヲ闢キ其稅ヲ權衡シ海外ニ輸出シ然シテ我國不足ノ物品ト交易シ海關保護稅ノ活用ヲ以テ内地ノ物品輸出ノ利害ヲ去就シ海外ヨリ輸入ノ物品ヲ計較シ其得失ニ從ツテ之カ稅額ヲ輕重シ常ニ輸出ノ物品ヲシテ輸入ノ物品ヨリ倍蓰セシムル事ニ注意シ以テ之カ稅法ヲ設クル<sup>(原註時款)</sup>則ハ海外ニ對シテ許多ノ利益ヲ得ヘシ最モ内地ニ於テハ稅法ノ平準ヲ極メ農民貢租ノ偏重ハ漸次消却シ至當公平ヲ得ルニ至リ始メテ上ニハ年ヲ逐テ歲入ノ利ヲ増シ下ニ偏重偏輕ノ弊害ナク實ニ稅法ノ要機ニシテ今日ノ急務ナリ聊微衷ヲ記シテ謹テ公評ヲ乞フ

附屬書二

租稅及關稅ノ改正竝ニ輸出入ノ利害ニ關スル說明書

我國今日租稅ノ改正唯其法ニ要アルノミコレヲ内ニスレハ物品及印稅等ノ制ヲ起シ用ニ隨ヒ事ニ由リ各其ノ額ヲ課分

シテ特リ農ニ歛ムルノ法ヲ止メ百般齊一輕重正平ノ則ヲ立テ普通ノ公理ニ遵フヘキトコレヲ外ニスレハ厚ク輸入ノ物ヲ稅シ輸出ノ品ヲ稅スル事無ク我製產ヲ保護スルノ海關稅ヲ興ストナリ然レトモ事ニ先後ノ順序アリ業ニ難易ノ差別アリ吾國今日百般ノ事唯從前ノ慣習ニ襲リ確律明法ニ依ルモノ寡ク百課ノ藝學淵博ナラス諸局ノ吏人其理ヲ會シ其用ニ通スル者或ハ十二三ヲ得難ク商賈貧薄工職拙劣貿易繁ナラス器械好カラス今若シ時ノ順序ヲ測ラス未タ學ハサルノ吏人ヲシテ未タ世ニ確明ナラサルノ法ニ依ラシメ物品其他ノ稅ヲ起シ海關防護ノ稅ヲ定メハ其業或ハ易シト謂ヘカラス故ニ能ク此二者ノ要ヲ荏苒ニ擧ラシメント欲セハ徐次左ノ目ヲ實スルニアルヘク存候

#### 田租ヲ薄ス

田租ヲ薄シ農ニ餘財アラシメハ自ラ商工ノ業ヲ繁ニシ地租輕ケレハ自ラ農耕ヲ勵スハ當然ノ理ト雖トモ教無クシテ飽煖ナルハ懈怠ヲ生スル媒ニシテ今若シ急ニ田租ヲ省カハ反テ農夫ヲ慢ラシメ窘窮荒蕪ヲ起スノ弊アリ故ニ先ツ能ク勸農ノ術ヲ講シ督作ノ制ヲ定メ而シテ後ニ減租ノ令ヲ出スラ良トスヘシ且夫レ商工物品ノ稅其他印稅許稅等能ク其法則

ヲ明ニシ收稅ノ額ヲ算セスシテ直ニ田租ヲ減セントセハ國用ノ會計ヲ維スヘカラス然リト雖トモ物其緒ヲ發セサレハ展フヘカラス故ニ業ニ難无ク事ニ害無キモノヨリコレヲ始メ先ツ田圃賣買ノ禁ヲ解キ地券ヲ更メ總テ沽券ノ法トナシ沽券ス就テ收稅ノ制ヲ取調フヘシ但シ現今減租ノ數ハ十分一二ノ間ニ在ル事ト存セラル

#### 物品其他印稅算ヲ起ス

無知ノ民ハ虛聲ニ驚クト況ヤ少シク其實アルニ似タルアラハ駭カサルベカラス吾國商民稅ヲ免カレ肆ニ業ヲ營ム猶且殷盛ナル事ヲ得ス動モスレハ時政ヲ罪シ或ハ商稅ノ起ラン事ヲ恐ル今若シ急ニ物品ヲ稅セハ无知ノ高民其聲ニ駭キ物價ヲ騰貴シ品位ヲ粗薄シ生産爲ニ傾衰シ工作爲ニ廢墮スヘシ又證印ノ稅ノ如キモ官ニ詳悉ノ法律無ケレハ速ニコレヲ起シ難シ故ニ此民ヲシテ稅ハ已レノ私物ヲ護スルノ用ニ供スルノ理ヲ會セシメ官ニ明法ノ吏アラシムルノ方法ヲ漸次ニコレヲ講求シ兼テ端緒ヲ開クカタメ沽券賣買ノ證印ニ稅シ或ハ無用ノ商賈ヲ稅シ一則立テ一事ヲ施シ終ニ詳明齊整ノ境ニ至ラシムルヲ至要トス

#### 輸入ノ稅ヲ重クス

ノ等差アルヘシ能ク其ノ我ニ利アルモノト否ラサル物トヲ辨別シテ利アルモノハ輕ク收メ不利ナルモノハ重ク歛メシムレ立則ノ要ト謂フヘシ故ニ酒醬煙草ノ類ハ最モ重クコレヲ稅シ糖蜜ノ類ハ是ニ次キ唐綫更紗其他木綿糸織木綿綫蠟燭ノ類ハマタコレニ次クヘキ學術技藝ノ器械ニ於テハ甚タ輕ク稅スヘシ蓋シ國家ヲ富スノ術特ニ製產ヲ殖スニ在ルノミ能其要領ヲ通觀シ彼地留學ノ生徒ヲシテ勉テ工藝ノ學ニ達セシメ速ニ自由貿易ノ議ニ至ラストモ實ニ保護ノ法ヲ旋候樣篤ト注意致シ度候

#### 輸出ノ稅ヲ輕ス

輸出ノ品ヲ稅セサルハ國ニ金貨ノ輸入ヲ増シ民ニ倍蓰ノ利ヲ得セシムルニ在リ而シテ金貨ノ増スニ隨ヒ倍蓰ノ益ヲ得ルニ就テ政府コレカ稅法ヲ置キ收テ國用ニ供ス是レコレヲ彼ニ取ラス是ニ收ムルノ法ト謂フヘシ然リト雖モ吾國今日ノ稅則特ニ農ニ歛ムルノミ未タ收得ノ多寡ニ隨ヒ商ニ稅スルノ法立サレハ假令金貨ノ増スアルモ倍蓰ノ益ヲ得ルモノアルモ政府ニ收稅ノ増加アルヘカラス或ハコレヲ彼ニ失シ又是ニ失スルノ損アラン故ニ內國ノ諸稅ヲ定メ國用充足ノ目途ヲ得ルニ至ル迄姑ク輸出ノ稅ヲ存シ能ク得失ヲ商量ス

ヘシ但緝織物緝糸茶卷烟草等ノ類ノ如キ國產民業ヲ殖スヘキモノハ勉メテコレカ稅ヲ薄シ輸出ノ數ヲ増スヘキ事ト存候

五六 明治四年十一月二日 太政官式部寮ヨリ  
西曆一八七三年十月十三日 岩倉大使宛

十一月四日遣外國使祭執行ニ關シ通知ノ件

附屬書 遣外國使祭次第書

來ル四日於神祇省遣外國使祭被爲行候間直垂着用第七字參集可有之候仍別紙次第書御廻シ申候也

辛未十一月二日

式部寮

岩倉右大臣殿

追テ御祭典濟ノ上ハ參

朝可有之候也

註 本件ニ關シテハ本號文書ト同文意ヲ以テ特命全權副使

及隨員等ヘモ通知セラレ居レリ

附屬書

十一月四日

遣外國使祭次第

本日第七字神殿御裝束ヲ奉仕ス

第八字神祇省式部寮著床

次太政大臣參議諸長官次官著床

次遣外國使及隨行官員著床

次神祇大輔昇殿開扉神樂歌ヲ奏ス

次神饌ヲ供ス神樂歌ヲ奏ス

次幣物ヲ供ス

次太政大臣參議諸長官次官式部頭進テ昇殿

各著座殿内東方  
北上西面

次太政大臣祝詞ヲ奏ス

次遣外國使及隨行官員拜禮

次太政大臣參議神祇輔拜禮

次諸長官次官拜禮了テ各降殿庭上ノ床ニ復ス

次神祇省奏任官拜禮了テ殿内著座西方北  
上東面

次幣物ヲ撤ス

次神饌ヲ撤ス神樂歌ヲ奏ス

次遣外國使及隨行官員神酒ヲ賜フ

次閉扉神樂歌ヲ奏ス

次各退出

以上

註 右附屬書ニ「次太政大臣祝詞ヲ奏ス」トアル處ノ祝詞

ニ關シテハ「岩倉公實記」參照

五七 明治四年十一月三日  
西曆一八七三年十月十四日

米國公使歸國ニ際シ條約改正使節派遣ニ關シ賜ハリ

タル勅語並ニ米國公使ノ言上振

勅語

我邦政體一新シ外交ノ誼モ亦日ヲ逐テ親密ナリ依テ各國政府江聘問ノ禮ヲ修メ交際ノ情誼益敦カラシメン爲メ特ニ重臣ヲ各國江派出シ其禮ヲ修メントス然ルニ各國ト取結タル條約改定ノ期既ニ近キニアリ我内地ノ改正大ニ之ニ關係スルヲ以テ併テ其事ヲ商議セシメントス幸ニ汝ニ托シテ朕意ヲ大統領ニ傳ヘ使臣等述ル所ノ意ヲシテ達セシメヨ

米公使御請口上

貴國政府ト我國政府ノ間ニ存シ來レル交誼ノ彌親密ナランコトヲ我國大統領深ク希望スルニ因リ

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 五七 五八

五八 明治四年十一月四日  
西曆一八七三年十月十五日

特命全權大使發遣式ニ際シ大使及副使ニ賜ハリタル

勅語

陛下ノ大使華盛頓府ニ來着セハ必ラス之ヲ悅フヘシ且向後兩國ノ交際ヲ敦厚ナラシメン趣意ヲ以テ陛下及ヒ大統領ニモ満足スヘキ法則ヲ設ケンタメ兩國ニ關係スル諸件々ヲ右大使ト熟議スヘシ是全ク兩國人民ノタメ大ニ裨益ヲ生スヘキモノナレハ此事ニ付テ者余ハ素ヨリ我國執政ニオキテモ眞實協力センモ敢而疑ヲ容レ玉ワザルヘシ

陛下今般大使ヲ派出セントシ玉フ

敬智ヲ敬祝ス大使各國ニ航シテ注目焦慮アランニハ貴國ハ固ヨリ各國ノ爲ニモ大ニ裨益ヲ生セン事大使我國滯留ノ間ハ各其尊位ニ應シ我國政府及ヒ人民ノ禮讓ヲ盡シ以テ待遇スヘキハ敢テ疑ヲ容レ玉ワザルヘシ

註 右ハ十月二十日米國公使御暇乞ノ爲參朝謁見ノ後更ニ十一月三日山里離宮ニ於テ内謁見ヲ賜ハリタル際ノモノナリ

今般汝等ヲ使トシ海外各國ニ赴カシム朕素ヨリ汝等ノ能ク其職ヲ盡シ使命ニ堪ユヘキヲ知ル依テ今國書ヲ付ス其レ能ク朕カ意ヲ體シテ努力セヨ朕今ヨリシテ汝等ノ無恙歸朝ノ日ヲ祝セン事ヲ俟ツ遠洋渡航千萬自重セヨ

五九 明治四年十一月四日  
西曆一八七三年十二月十五日

特命全權大使及同副使ニ全權御委任ノ國書

澳 布 瑞西 米 荷蘭 伊太 葡 英  
丁 獨 乙 瑞典 白 西 魯 佛

大日本天皇御名敬テ威望隆盛及誼親密ナル

米 瑞西 佛 大總統 白ス朕天佑ヲ保有シ萬世一系ナル皇  
外各國 皇帝陛下 祚ヲ踐ミシヨリ以來未タ和親ノ各國ニ聘問ノ禮ヲ修メサル  
ヲ以テ茲ニ朕カ信任貴重ノ大臣右大臣正二位岩倉具視ヲ特  
命全權大使トシ參議從三位木戸孝允大藏卿從三位大久保利  
通工部大輔從四位伊藤博文外務少輔從四位山口尙芳ヲ特命  
全權副使トシ共ニ全權ヲ委任シ貴國及各國ニ派出シ聘問ノ  
禮ヲ修メ益親好ノ情誼ヲ厚クセント欲ス且貴國ト結ヒタル  
條約ヲ改正スルノ期近ク來歲ニアルヲ以テ朕カ期望豫圖ス

六〇 明治四年十一月四日  
西曆一八七三年十二月十五日

特命全權大使ノ使命ニ關スル勅旨

勅旨

一使命ノ大旨國書ヲ體シ列國條約及稅則ヲ審考シ國ノ權理  
ト利益トヲ失ハサル事ニ注意シ談判ノ條理處事ノ例規單  
ニ公法ニ照準シ內勅及條約改正ニヨリ目的ノ件々實際履  
行スヘキ順序ノ別勅旨ヲ奉シ便宜從事スヘシ

一馬關償金ノ事ハ便宜談判ヲ遂クヘシ若シ外國人民利益ト  
ナルヘキ事ト交換ノ談判ニ涉ル事アリトモ無稅又ハ減稅  
等ノ談判ハ受クヘカラス

但自後開港ノ談判ニ及フ時ハ越前敦賀志摩鳥羽三陸中ニ  
テ一ヶ所北海道ニテ一ヶ所ノ内一港ヲ開ク談判約束ヲナ  
シ得ヘシ

新潟港ヲ閉チ別ニ一港ヲ開ク談判ニ及フ時ハ前ニ載ル港  
ノ内ヲ以テ之ニ換ルノ談判約束ヲナスヘシ

一各國ニ於テ要用ノ人物ヲ選テ之ヲ雇ヒ及器具ヲ購スル事  
ヲ專決シ理事官ヨリ此事ヲ申請スル時ハ之ヲ可否判斷ス  
ヘシ

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六〇

ル所ハ開明各國ニ比シク人民ヲシテ其公權ト公利トヲ保有  
セシメン爲ニ從來ノ定約ヲ釐正セント欲スト雖モ我國ノ開  
化未タ浹カラス政律モ亦從テ異レハ多少ノ時月ヲ費スニ非  
レハ其期望ヲ達スル能ハス故ニ勉メテ開明各國ニ行ハル、  
諸方法ヲ擇ヒ之ヲ我國ニ施スニ適宜妥當ナルヲ采リ漸次ニ  
政俗ヲ革メ同一致ナラシメンコトヲ欲ス於是我國ノ事情ヲ  
貴國政府ニ詢リ其考案ヲ得テ以テ現今將來施設スヘキ方略  
ヲ商量セシメ使臣歸國ノ上條約改正ノ議ニ及ヒ朕カ期望豫  
圖スル所ヲ達セント欲ス此使臣ハ朕カ貴重信任スル所ナレ  
ハ

大總統 能ク其言ヲ信聽シ之ヲ寵待榮遇セラレンコトヲ望ミ  
且切ニ  
大總統 康福貴國ノ安寧ヲ祈ル  
明治四年辛未十一月四日東京宮城ニ於テ親ヲ名ヲ記シ  
璽ヲ鈐ス

御名

國璽

太政大臣從一位 三條實美花押

一條約アル國々ノ内未タ辨務使ヲ派出セサル國ニ辨務使ヲ  
置クコトヲ約束スルヲ得ヘシ而シテ一國ニ一員ヲ置キ或  
ハ兩國ヲ兼任セシムルハ便宜考定シテ其狀ヲ具シ報告ス  
ヘシ

一各理事官ヲ各國ニ分遣シ擔當ノ科目ヲ研究習學セシムル  
ハ實地談判ノ便宜ニ從ヒ之ヲ定メ及其行事ノ循序期限等  
之ヲ指揮スヘシ

一隨行ノ官員其材ヲ量テ之ニ科目ヲ分チ各國ニ留メテ研究  
習學セシメ及各國ニ官費ヲ以テ留學スル生徒ノ分科修業  
ヲ檢査案定シ失行無狀ノモノハ歸國ヲ申渡スヘシ

但留學生徒ノ費用ヲ裁省シ其方ヲ檢定スヘシ  
一諸官員ノ行狀ニ注意シ訴訟アル時ハ之ヲ裁斷シ非違ヲ犯  
ス事アルカ或ハ奉職無狀ナル事アラハ其狀ヲ具シ歸國ヲ  
申渡スヘシ

一各國往復ノ公書談判ノ顛末其時々要旨ヲ書錄シ速ニ之ヲ  
報告スヘシ

一凡テ談判ノ旨趣副使一同豫議シ獨自ノ專斷スヘカラス  
右勅旨件々宜ク遵奉シテ愆ル事勿ルヘシ

奉勅 太政大臣 三條實美花押

六一 明治四年十一月四日  
西曆一八七二年十月十五日

條約改正要目ニ關スル別勅旨

別勅旨

條約改正ニ付目的トシタル件々ヲ實際ニ履行スヘキ  
順序

一三府五港ニハ各國ノ人民ノ來住ヲ許シタルニ付以來外國  
人居留地ノ區別ヲ廢シ彼我人民自由ニ雜居スル事ヲ許ス  
ヘシ

一右ノ外國人等ハ都テ日本政府ノ法律ノ下ニ立チ其地方官  
廳ノ規則ヲ遵奉スヘシ故ニ其地ニ居住セント欲スル者ハ  
三府五港ノ官廳ニ來リテ何區何街ニ住シ何産業ヲ營ナマ  
ント欲スルコト并ニ生國姓名等ヲ願書ニ認メテ申立ヘシ  
是ハ記錄局ノ所務タルニ付港ノ官廳ニ各記錄局ヲ取設ケ  
外國人ヲ使用スヘシ

一三府五港ノ外ハ外國人ヲ居住セシメズト雖モ其全國中ヲ  
自由ニ旅行スルハ其通權中ニアルヘシ故ニ旅行ヲ願フ者  
ハ港ノ官廳ニ來リテ旅行免狀即チ往來切手ヲ乞フヘシ此  
往來切手ニハ其地ノ知事ニ名記スヘシ

人ト中ヨリ撰ミ出シ假令ハ某國ノ法ヲ標本トシテ之ヲ斟  
酌シテ決定セシムヘシ目今ノ制度寮ヲ擴充スルノ理ナリ  
而シテ其議法官員ヨリ進呈シタル法律案ハ三院ニテ議定  
シテ初テ法トナシ之ヲ公布シテ裁判所ノ法律トナサシム  
ヘシ

右別勅旨件々宜シク遵奉シテ愆ル事勿ルヘシ

奉勅 太政大臣 三 條 實 美花押

六二 明治四年十一月五日  
西曆一八七二年十月十六日

田邊外務少丞ヨリ  
伊國公使館書記官宛

岩倉大使一行各國公使へ會見致スヘキ旨豫告ノ件

附記 各國公使ト會見ノ席上ニ於ケル岩倉大使ノ口上振

以手紙致啓上候然ハ過日貴公使より各國公使御一同今般發  
遣の我使節へ御訊問被成度義御尊有之候處右は彌來る十日  
即西洋十二 大使初一同横濱表へ發向致候に付其翌十一日 西洋  
月廿一日 日同所於て御入來有之候様致度尤も場所并刻限の義は其砌  
取定前以て御報知可申候間此段貴公使へ御通達被成置度候  
右可得御意如此御座候以上

明治四年辛未十一月五日

外務少丞 田 邊 太 一

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六二 六三

一日本政府ノ職務ニ仕用セラル、外國人ハ即チ日本政府ノ  
官員ナレハ右ノ制限ニ拘ラサルヘシ且ツ鑛山耕作等ノ產  
業ニ付府港外ニ居住スル事ハ其官廳ノ特許ヲ得サルベカ  
ラス

一日本地内ニ居住スル外國人ハ日本政府ノ法律制度ニ服從  
スルヲ以テ内外人民ノ別ヲ論セス其訴訟ヲ裁判シ其罪狀  
ヲ審案スヘキ裁判所ヲ設クヘシ此裁判所ノ長官ハ日本人  
タルヘシト雖モ其法律ヲ審議考定スルノ法官ハ各國ノ法  
律ニ通曉ナル外國人ヲ使用シ日本官員ト共ニ法官ノ列ニ  
加ハラシムヘシ

一東京ニ大裁判所ヲ設ケ各地ニテ審定シ難キ所ノ訴訟獄案  
ヲ持出シテ之ヲ裁判セシムヘシ此ノ大裁判所ノ法官モ前  
同様外國人ヲ使用シテ其列ニ加ハラシムヘシ

一右ノ裁判所ヲ建ル以上ハ外國公使岡士等ハ一切日本ノ民  
法刑法ヲ論議スルコトヲ得ス又其國民タリトモ日本地内  
ニ居住スル者ノ訴訟獄案ヲ決スル事ヲ得サルヘシ

一右ノ裁判所ニ於テ遵奉スル所ノ民法刑法ハ預シテ議法官  
ヲ設ケテ之ヲ議定セシムヘシ此ノ議法官ハ外國人ト日本  
人ト中ヨリ撰ミ出シ假令ハ某國ノ法ヲ標本トシテ之ヲ斟

伊太里國公使館

書 史 御 中

註 本件ニ關シテハ「岩倉公實記」ニ「十一日具視裁判所

ニ於テ在留ノ各國公使及書記官ニ晚餐ヲ供シテ別ヲ告  
ク」云々ノ記載アリ右席上ニ於ケル岩倉大使ノ口上振  
記錄中ニ存スルヲ以テ左ニ附記ス

附記

各國公使御招待ノ節大使御口上振

今航發航ニ付テハ萬里分袂ノ情深ク愛惜スル所ニ候閣下折  
角御堅固御奉職被成度拙者共ニモ首尾能使命ヲ了シ交際益  
親昵ナラン様預シメ所祝祈候

六三

明治四年十一月五日 外務省ヨリ  
西曆一八七二年十月十六日 兵部省宛

岩倉大使神奈川出帆ノ際ノ祝砲發數問合ノ件竝ニ右  
ニ關シ同大使ノ資格照會ノ兵部省附紙

十一月五日達す

兵部省御中

外 務 省

今般特命全權大使神奈川港出帆の節祝砲御施行可相成就て  
は右發數何發にて相當の義に候哉神奈川縣より伺出候に付

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六四 六五

今日中御取調御申越有之度此段至急及御掛合候也  
(略)

本書特命全權大使ノ義者外國へ比較致シ候得ハ何官ニ相當候哉且  
ツ天子ヲ下ル事何等辨務使ヨリ上ル事何等ト申事於御省ハ外國へ  
御布告相成候義ニ付御取調可有之委詳御廻答有之度候也

十一月五日

兵 部 省

### 六四

明治四年十一月六日 外務省ヨリ  
西曆一八七三年十月十七日 兵部省宛

岩倉大使ノ資格竝ニ右ニ相當スヘキ祝砲發數ニ就キ  
意見回答ノ件

兵部省御中

外 務 省

昨日祝砲の義に付致御掛合候處附紙を以て特命全權大使の  
義外國へ比較候へは何官に相當候哉且 天子を下る事何等  
辨務使を上る事何等の義御尋越致承知候抑今般大使の本官  
は右大臣にて第一等諸省卿の上に居り 天子を下る事一等  
大辨務使を上る事二等たるへき歟加之特命大使の義は乃ち  
天子の名代にて各國にても 天子同様の敬禮可相盡義に有  
之素より 皇國の政體外國の制に比較難致廉有之候へとも  
前條の次第推考候へは發數十七發より以上廿發迄の間に可

ルモ右ハ省略セリ

### 六六

明治四年十一月七日  
西曆一八七三年十月十八日

大遣遣外中ハ内外照應シテ内政ノ處理ニ當ルヘキ旨  
ノ大臣參議院省使長次官約定

約 定

今般特命全權大使派出ノ一舉ハ洵ニ不容易大事業ニテ全國  
ノ隆替

皇運ノ泰否ニ關係スル事ナレハ中朝ノ官員派出ノ使員ト内  
外照應氣脈貫通一致勉力セサレハ成功難奏萬一議論矛盾シ  
目的差違ヲ生スル時ハ國事ヲ誤リ國辱ヲ醸スヘキニ由リ爰  
ニ其要旨ノ條件ヲ具列シ其事務ヲ委任擔當スル諸官員連名  
調印シ一々遵奉シテ之ニ違背スルナキヲ證ス

第一款

御國書并遣使ノ旨趣ヲ奉シ一致勉力シ議論矛盾目的差違ヲ  
生スヘカラス

第二款

中外要用ノ事件ハ其時々互ニ報告シ一月兩次ノ書信ハ必ス

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六六

七〇

有之歟乍去右等の義は兼て御省御規則も可有之自然御取調  
難相成候へは當省於ても決定可致權無之に付其御省より政  
府へ御伺相成可然義と存候仍て此段再答旁申進候也

十一月六日

### 六五

明治四年十一月七日 兵部省ヨリ  
西曆一八七三年十月十七日 外務省宛

岩倉大使ヘノ祝砲發數ハ十九發ヲ至當ト考フル旨回  
答ノ件

追々御懸合有之候特命全權大使祝砲の儀於當省も致推考候  
所彼邦アムバスサドルと同振合の儀と被存候英國海軍條例  
原名クイーンスレギュレーション等え致照準候ても砲數拾  
九發至當と被存候此段及御回報候也

辛未十一月七日

外務省御中

兵 部 省

註 右ニ依リ外務省ハ同日附神奈川縣宛書翰ヲ以テ右ノ旨  
指令シ居レリ尙右祝砲發射ノ狀況ニ關シテハ十一月二  
十三日附書翰ヲ以テ神奈川縣ヨリ外務省宛報告アリタ

缺クヘカラス

第三款

中外照應シテ事務ヲ處置スル爲メ特ニ大使事務管理ノ官員  
ニ命シテ之ニ從事セシメ來歲大使歸國ノ上ハ中朝事務ニ任  
スル官員ト共ニ理事官等ニ交代シテ外國ニ派出セシムヘシ

第四款

大使使命ヲ遂ケ歸國ノ上ハ各國ニ於テ商議及考案セシ條件  
ヲ參酌考定シ之ヲ實地ニ施行スヘシ

第五款

各理事官ノ親見習學シテ考案セシ方法ハ酌定ノ上順次之ヲ  
實地ニ施行シ習學了ラサルモノアレハ代理理事官之ヲ引請完  
備ナラシムヘシ

第六款

内地ノ事務ハ大使歸國ノ上大ニ改正スル目的ナレハ其間可  
成丈々新規ノ改正ヲ要スヘカラス萬一已ヲ得スシテ改正ス  
ル事アラハ派出ノ大使ニ照會ヲ爲スヘシ

第七款

廢藩置縣ノ處置ハ内地政務ノ純一ニ歸セシムヘキ基ナレハ  
修理ヲ逐テ順次其實效ヲ舉ケ改正ノ地歩ヲナサシムヘシ

七一

第八款

諸官省長官ノ缺員ナルハ別ニ任セス參議之ヲ分任シ其規模目的ヲ變革セス

第九款

諸官省トモ勅奏判ヲ論セス官員ヲ増益スヘカラス若シ己ヲ得スシテ増員ヲ要スル時ハ其情由ヲ具シテ決裁ヲ乞フヘシ

第十款

諸官省トモ現今雇入外國人ノ外更ニ雇入ルヘカラス若シ己ヲ得スシテ雇入ヲ要スル時ハ其情由ヲ具シテ決裁ヲ乞フヘシ

第十一款

右院定日ノ會議ヲ休メ議スヘキ事アルニ方テハ正院ヨリ其旨ヲ下シ毎會期日ヲ定ムヘシ

第十二款

款内ノ條件之ヲ遵守シテ違背スヘカラス此約定ニ連名スル官員故ナク變置スヘカラス此條件中若シ増員ヲ要スル時ハ中外照會シテ之ヲ決スヘシ

明治四年辛未十一月

太政大臣 三條 實美

右大臣 岩倉具視

參議 西鄉隆盛

參議 木戸孝允

參議 大隈重信

參議 板垣正形

議長 後藤元輝

神祇大輔 福羽美靜

外務卿 副島種臣

大藏卿 大久保利通

大藏大輔 井上馨

兵部大輔 山縣有朋

文部卿 大木喬任

工部大輔 伊藤博文

司法大輔 佐々木高行

司法大輔 穴戸磯

宮内卿 德太寺實則

開拓次官 黑田清隆

註 本號文書日附ハ「岩倉公實記」ニ據ル

六七

明治四年十一月七日  
西曆一八七二年十二月十八日

寺島外務大輔ヨリ  
各國公使宛  
花房外務大記ヨリ  
橫濱在勤白 瑞西、葡、兩館在勤  
露各領事宛

岩倉大使一行人名竝ニ旅程通知ノ件

附屬書 岩倉大使一行人名簿

十一月七日達

以手紙致啓上候然ハ去月十四日書翰を以今般大使を締盟各國に派出致し候に付云々申進置候處彌本月中旬米利堅郵船を以出帆と確定いたし候に付則一行人員書壹通差進申候回歷の順次は先橫濱より米利堅之發向其上の都合により追々其政府へ御報知可及積に候間此段貴國政府へ御通報有之度右可得御意如此御座候以上

辛未十一月二日草

外務大輔

英佛米蘭伊西澳獨丁瑞典公使閣下

右外務卿の命に依り可得御意如此御座候以上

花房大記

白瑞魯葡領事

註 本號文書ニ對シ十一月十六日附書翰ヲ以テ西班牙國代

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六七

附屬書

各國使節一行名前書

理公使ヨリ副島外務卿等宛了承ノ旨回答アリタリ

特命全權大使

副使

右大臣 岩倉具視

參議 木戸孝允

大藏卿 大久保利通

工部大輔 伊藤博文

外務少輔 山口尙芳

外務少丞 田邊太一

外務大記 鹽田篤信

外務六等出仕 何禮之

外務少記 渡邊洪基

外務七等出仕 小松濟治

外務七等出仕 林董三郎

外務七等出仕 川路寬堂

外務七等出仕 山内一式

文部大助教 池田政懋

外務大錄 安藤忠經

理事官

會計兼務

大使隨行

山田理事官隨行  
佐々木理事官隨行

東久世理事官隨行

陸軍少將 山田顯義  
司法大輔 佐々木高行  
侍從長 東久世通禧  
戶籍頭 田中光顯  
造船頭 肥田爲良  
文部大丞 田中不二麿  
少議官 高崎豐麿  
式部助 五辻安仲  
外務大記 野村靖  
兵庫縣權知事 中山信彬  
神奈川縣大參事 内海忠勝  
權少外史 久米丈市  
租稅權頭 安場保和  
兵學大教授 原田一道  
司法權中判事 岡内重俊  
司法權中判事 中野健明  
司法權中判事 平賀義質  
司法權中判事 長野文炳  
宮内大丞 村田經滿

田中理事官隨行

犯稅權助 若山儀一

肥田理事官隨行  
田中不二麿理事官隨行

檢查大屬 杉山一成  
租稅權大屬 福田命保  
鐵道中屬 瓜生震  
文部中教授 長與秉繼  
正七位 中島永元

高崎理事官隨行  
工學質問トシテ英國へ罷越

少議生 安川繁成  
文部中助教 近藤昌綱  
文部中助教 今村和郎  
内村良藏

註 右人名簿ハ之ヲ五一ノ附記十一月七日現在ノ分ト比較  
スルニ異同少カラス

六八

明治四年十一月七日 副島外務卿等ヨリ  
西曆一八七〇年十二月六日 英、佛、伊、蘭、獨各公使宛

岩倉大使派遣ニ際シ條約改正希望要旨通知ノ件

十一月七日達ス

以手紙致啓上候然ハ今般

天皇陛下より岩倉右大臣始貴國政府え爲使節差遣候に付貴國と取結候條約改正の儀をも談判可相及右大意閣下迄申入置候様御頼談の趣承知致し候右趣意は過日陳述候通貴國及其他締盟各國の政府に諮議せんを要し歸朝の上追々商議確定可致義に付今こゝに舊來の條約により改正の條款を預報する能わすといへとも凡そ中外民人の訴訟罪犯の裁判收稅規則等を改むるの意に外ならず隨て游歩規程并居留地等の事にも相及可申候前條の趣可然御含有之度候右可得御意如此候

英佛伊蘭字公使

兩名

註 「御頼談」云々ニ關シテハ五二參照

旅行表

| 滞在日限             | 途上の旅泊           | 條約國   | 旅程            | 旅行の月名      |
|------------------|-----------------|-------|---------------|------------|
| 天保十二年十二月<br>第十二月 | 横濱より<br>桑法朗西哥斯  | 第一合衆國 | 大平洋           | 廿四日<br>第一月 |
| 四日               | 桑法朗西哥斯より<br>華盛頓 | 第一合衆國 | ヲマハ、チカゴ、ナイヤガラ | 七日<br>同上   |

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 六九

六九

明治四年十一月十二日 外務省ヨリ  
西曆一八七〇年十二月十三日 太政官正院宛

岩倉大使一行本日出帆セシ旨ノ神奈川縣ヨリノ電信  
傳達ノ件

附記 岩倉大使一行旅程表

特命全權大使一行之官員今十二日第十字乗船夕第一字出帆致候旨電信機ヲ以テ神奈川縣ヨリ報知有之候間此段御届申候也

辛未十一月十二日

正院御中

外務省

註 岩倉大使一行ノ旅程豫定表便宜同大使出帆ノ日ノ項ニ

附記セリ

附記

|     |            |          |        |                                    |     |     |
|-----|------------|----------|--------|------------------------------------|-----|-----|
| 廿日  | 華盛頓より      | 倫敦       | 第三英國   | 紐約育                                | 十四日 | 第三月 |
| 廿日  | 倫敦より       | 巴勒       | 第四佛國   | ドーウエル、加電 <small>（十時より十時の間）</small> | 一日  | 同上  |
| 廿日  | 巴勒より       | 伯靈       | 第五普國   | コローン、マグデビュルク                       | 二日  | 第四月 |
| 十五日 | 伯靈より       | 聖彼得堡     | 第六魯國   | ジュナポールグ（晝夜）                        | 三日  | 同上  |
| 十五日 | 聖彼得堡より     | ストックホルム  | 第七瑞典   | 蒸氣船                                | 二日  | 第五月 |
| 十日  | ストックホルムより  | コッペンハーゲン | 第八丁抹   | 半は蒸氣船                              | 二日  | 第六月 |
| 八日  | コッペンハーゲンより | ハーヘ      | 第九荷蘭   | ハンビュルク                             | 二日  | 同上  |
| 八日  | ハーヘより      | ブルユツセルス  | 第十白耳義  | アントウエルブ                            | 一日  | 同上  |
| 八日  | ブルユツセルスより  | 巴勒       |        | 六時半是最も短き路程を云                       | 一日  | 第七月 |
| 八日  | 巴勒より       | 馬德里地     | 第十一西班牙 | バヨンネ（鐵路による）                        | 二日  | 同上  |
| 十日  | 馬德里地より     | カリス門     | 第十二葡國  |                                    | 一日  | 同上  |
| 八日  | カリス門より     | 巴勒       |        |                                    | 三日  | 同上  |
| 八日  | 巴勒より       | ベルン      | 第十三瑞國  | ジジョン                               | 一日  | 第八月 |
| 八日  | ベルンより      | 維納       | 第十四奧國  | ミニチ、リンス                            | 二日  | 同上  |
| 十五日 | 維納より       | フロレンス    | 第十五太利  | トリースト、ウエニス、ボログナ                    | 二日  | 同上  |
| 十日  | フロレンスより    | 横濱       |        | スエズ等                               | 五十日 | 第十月 |

滞在日數惣計百九十五日則ち六ヶ月半  
旅行日數四ヶ月則ち百廿日

滞在並に旅行日數合して十ヶ月半

○哈哇は條約國中の列に加へず若し加る時は第二とし英國を第三と爲すへし

○別紙歐羅巴圖を以て旅行の路次を誌せり且旅行の路次の差別等は次に附す

註 右附記末尾ニ謂フ「別紙」見當ラス

七〇 明治四年二月二十五日 桑港在勤日本領事「ブルークス」  
西曆一八七二年一月五日 副島外務卿宛

岩倉大使歡迎ノ手配ヲ了セル旨並ニ大使ニ隨行不在  
中ノ代理者ヲ委任セル旨報告ノ件

以手紙致啓上候然は去月中到著并に出立人名前書別紙差進  
申候將又條約各國え向け使節御發程の趣御來示の御書簡隨  
に落手致候付ては拙者右使節を相迎へ且惣て使節の事務并  
に遊樂の爲其用意を致候は愉快の事に可有之候尙又貴下よ  
りパリに在る鮫嶋氏えの電報は已に第十二月十七日に同  
氏え相廻し申候斯く拙者右使節到來の新聞を板行屋の手代

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 七〇

え申付置且右の趣合衆國及び歐羅巴全洲の上に電信を通し  
候へは種々の新聞にて此旨公布に及び且夫々官員に面會被  
致右使節厚き接待を受らるべくと拙者に於て満足不過之候  
然るにワシントン府は勿論歐羅巴えも拙者同伴可致候付て  
は森有禮氏より當時拙者の書記官相勤居候ホラス、デ、ジ  
エル氏に暫時拙者の留守中我事務を相勤候様可申付旨拙  
者え被申越候へは同氏は我職務を相勤め且通常拙者宛の書  
狀は是迄拙者より直に報酬致候へども爾今拙者に代り同氏  
より回答可致候尙又拙者の職掌に於て使節の意に適せしめ  
日本政府の爲十分の成效を奏し惣て不都合無之様盡力可致  
候餘は當便に差上候他の書狀にて御報申上候以上

千八百七十二年第一月五日

ウラルコツト、ブルークス

外務卿輔閣下

註 本號文書追書ニ謂フ「別紙」見當ラス

（右原文）

Consulate of Japan for California, U.S.A.  
San Francisco, January 5th 1872.

Sirs,

I have the honor to report the arrivals and departures for the past month as per enclosed lists.

Your despatch advising the projected departure of the Embassy to the Treaty Powers, was promptly received. It will afford me great pleasure to receive them here, and to make for them all necessary arrangements for their business and comfort.

Your telegram to Mr. Sameshima at Paris, was forwarded to him Dec. 17th prepaid by me. I gave the news of the coming of the embassy to the agent of the Press, and it was telegraphed all over the United States and Europe. From the various newspaper notices, and personal interviews with officers here, I am satisfied they will receive a very warm reception. I shall attend them as far as Washington, and probably to Europe. Mr. Arinori Mori has instructed me, to appoint Mr. Horace D. Dunn, who is now my Secretary, to act in my place during my temporary absence. He will perform my duties here, and letters address to me as usual, will be answered by him for me, the same as though I was personally present.

Rest assured I shall spare no efforts within my power, to make the whole trip of the Embassy both agreeable to them, and a perfect success for the Government of Japan.

Referring to other despatches by this mail,

I remain,

Very Respectfully,

CHAR. WOLCOTT BROOKS,  
Japanese Consul.

To

Their Excellencies

The Ministers of Foreign Affairs,

Tokio, Japan.

七一

明治四年二月十一日 長崎縣ヨリ  
西曆一千九百一十三年二月十一日 外務省宛

岩倉大使桑港安着ヲ報スル電信送付ノ件

附屬書 十二月七日桑港ヨリ長崎縣令宛右電信

別 錄 岩倉大使一行渡米日記抄

當港丁抹國電信社中より別紙横文差出候に付不取敢送呈仕候以上

辛未十二月十一日

長 崎 縣

外務省 御中

附屬書

千八百七十二年十一月十七日午後六字四十五ミニュート過  
サンフランシスコより長崎縣へ報知

日本大使無事に御着相成候義を政府へ爲御知申候

千八百七十二年十一月十六日サンフランシスコ

ヅワニンキ

長崎縣令へ

註 右附屬書へ更ニ十二月十八日附書翰ヲ以テ外務省ヨリ  
太政官正院宛送付セラレ居レリ

別 錄

(岩倉大使一行渡米日記抄)

略日記

十二月廿二日<sup>第一</sup>日雨第七字館大使以下一同馬車にて出港  
甲比丹號火輪に乘し直ちにヲークランドに渡り別仕立の  
蒸汽車<sup>會社より別に仕立しものなり</sup>を以て東に進みストウクトンにて顯  
狂院巡覽同日第六字三十分サクラメント府に達す當市は

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 七一

加利福尼の都府にして使節饗應の爲め官員出迎ひ當處にて右餐應の爲千五百元を募りし由同夜劇場に招かれ大使以下一同見物曉第一字歸館

廿三日<sup>第二</sup>日晴第十字出馬車合衆鐵道會社の製造所見物第十二字州の議政堂に至り上下院其外見物して第六字議事堂點燈見物第八字公筵を受け使節五名理事官并書記官五名之に列し州の鎮臺以下之に對し演舌あり同第三字發輪

廿六日第六字ラクデンに朝餐す此處にて車を換へ新約克より使節の爲に來る火車に乗るへきを前途雪深きを以て來る能はず本邑旅館に乏しきを以て路を曲けて鹽湖府に至る<sup>此府はユタ郡の首府なり</sup>

此處にても同しく饗應掛りを任し金を募り馬車等を備ふ

廿八日晴第十一字郡の議事堂に至り郡司市正以下百餘人に接彼我演舌あり畢て教堂并に博物館等を見物す

廿九日晴第十一字出車府の東方二里半強トングラス堡に至り酒菓を受け其將軍以下演舌あり

明治第五壬申正月<sup>第二</sup>月九日雨雪交降る各自正を賀す夜第八字を以て米公使及當地の官員及び應接掛りを饗應す彼我演舌あり之に列せざる我官員へは祝酒として三般を賜ふ

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 七二七三

二日美晴哈維國公使、デロング氏より書翰を大使副使に贈る

公文

三日右送書を遣す

四日陰晴不定夜當府知事ベード及び其地市中官員陸軍將士等より先約ありて此夕第十字旅館に於て大使副使書記理事官を饗せり此宴は公宴に非ず私に屬する者なり

食後踊舞あり第三字閉堂

十日<sup>第二月</sup>十八日晴今朝ラグランより森辨務使えの公信を得たり開封して分配す<sup>廿</sup>日に桑港へ着する者なり

七二

明治五年一月十日 大使隨行鹽田一等書記官(米國ニ西曆一八七〇年二月十八日 テ)ヨリ 外務省宛

岩倉大使一行ニ加ハル爲佛國ヨリ紐育ニ到着セル旨  
等報告ノ件

申二月十八日着

以書狀啓上致候然は拙生義去る十二月廿四日佛國巴里斯出立一昨日「西曆二月十六日我」ニヨル<sup>「正月七日ニ當ルカ」</sup>當地え着致候岩倉卿公には未た御着無之サンフランシスコより途中降雪甚敷鐵路往來相

八〇

絶へ無據ソールトレキー御滞留の由新聞紙中に相見へ申候尤も不日鐵路も相開け華盛頓へ御着可相成と存候右に付拙生義も明々當地出立華盛頓え相越候積に有之候

一 別紙<sup>(註)別紙不持</sup>御用狀拙生巴里より持越候處今度フアンブラント義御地え相越候に付即ち同人え相托し差出申候御落手有之度候右の段可得御意如斯に御座候已上

鹽田 大記

外務省御中

尙以別紙拙生書狀早々御届け可被下候

七三

明治五年二月十七日 英國臨時代理公使ヨリ西曆一八七〇年三月十五日 副島外務卿宛

岩倉大使一行ヲ歡迎シ且條約改正期ニ同意スル旨ノ  
本國政府ノ意向傳達ノ件

去歲十月十四日寺島宗則之書翰ヲ以右大臣岩倉具視ヲ特命全權大使トシ參議木戸孝允大藏卿大久保利保工部大輔伊藤博文外務少輔山口尙芳ヲ特命全權副使トシ訂盟之各國へ派出シ益兩國親好之情誼ヲ厚ク被致度趣其寫直様本國政府ニ相廻シ候處前書使節大貌利太尼亞へ立越候段本國政府ニ於

テ喜悅之至厚ク應對致シ使節之銘々懇切ニ變應可致旨外務執政之命ニ依リ申上候且貴國ト我國之條約改訂之儀使節歸國マデ延引被致度御請求ニ可任旨是亦可申上様被命候右之趣可得貴意如此御座候 以上

二月十七日

英國代理公使

ヘン オ ブラム

副島外務卿閣下  
寺島外務大輔閣下

(右原文)

Yedo, March 25, 1872.

Sir,

I duly communicated to Her Majesty's Government a copy of the note of the 26th November last which I received from Terashima Munenori, informing me that the Udaijin Iwakura Tomomi had been appointed Chief Ambassador Extraordinary Plenipotentiary, and the Councillor of State Kido Takasuke, the Minister of Finance Okubo Toshimichi, the Vice Minister of Works Itô Hirobumi, and the Assistant Vice Minister for Foreign Affairs Ya-

maguchi Nawoyoshi, Vice Ambassadors. Extraordinary Plenipotentiary, to be sent on a special mission to the States which are the Allies of Japan for the purpose of cementing more closely the existing relations between it and those States.

I have now the honour to state to Your Excellency, in accordance with instructions which I have received from Her Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs, that Her Majesty's Government are gratified to think that this Embassy will visit Great Britain, where a cordial reception will be assured to it, and that they will have great pleasure in showing every attention to its members.

I am also instructed to inform the Government of His Majesty the Tennô that in accordance with their desire Her Majesty's Government are quite willing to defer the Revision of the Treaty between Japan and Great Britain till after the return of the Embassy to its native country.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency the assurance of my highest consideration.

岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 七三

八一

F. O. ADAMS,  
H. B. M's Chargé d'Affaires  
in Japan.

His Excellency  
Soyejima Tanemoni,  
etc., etc., etc.

註 四七ニ對シテハ右ノ外横濱在勤瑞西國總領事次號七四  
(日附ハ二月二十九日、發信地ハ横濱ナリ) ヨリノ返  
翰及七五西班牙代理公使ノ返翰アル以外ノ各國ヨリ送  
翰見當ラヌ

明治五年二月二十九日 横濱在勤瑞西國總領事ヨリ  
西曆一八七二年四月六日 副島外務卿宛

條約改正ニ同意シ又岩倉大使一行ヲ款待スヘキ旨ノ  
本國政府ノ意向傳達ノ件

日本天皇陛下ヨリ條約各國ヘ被遣タル使節ノ義ニ付貴答ト  
シテ閣下ヘ左ノ事ヲ可致報告旨我政府ノ命ヲ受タリ  
瑞西政府ト貴政府トノ條約改定千八百七十二年第七月一日  
ト定タルヲ使節歸國ノ後少シクソノ期限ヲ被延度趣我政府  
之ニ同意ス

我政府コノ使節ノ來ルヲ悦ビ條約ニ基ツキ更ニ互ノ交誼ヲ  
厚クセンコトヲ願フテ以テ使節ニ待スベシ且力ヲ盡シテ使  
節ノタメニ周旋シソノ願フトコロノ我國ノ政道交友經濟貿  
易ノ法ヲ集メテ之ニ報告セント欲ス故ニソノ準備ヲナスタ  
メ明治四年十月十三日附 天皇陛下ノ政府ノ公書ニ付我政  
府先ツ交際及ビ領事ノ事ヲ掌ル者ニ命シテ預ジメソノ使節  
ノ此國ニ來ル時日ヲ聞定シム

千八百七十二年第四月六日 於横濱

日本在留瑞西列國總領事

シ、ブレンウアルド

頓首再拜

外務卿

副島種臣閣下

(右英文)

CONSULAT GÉNÉRAL DE SUISSE  
AU JAPON

Yokohama, April 6th 1872.

Excellency,

I am instructed by my Government, in reply to

your communication relating to the Embassy which  
has been sent by H. I. M. the Tenno of Japan to  
the Governments of the different Treaty Powers, to  
inform Your Excellency of the following:

The Swiss Government agrees to the wish ex-  
pressed by Your Government to extend the term of  
the Revision of the Treaty between both countries  
which was fixed for the 1st July 1872, to a later  
period, after the return of the Embassy.

The Swiss Government further begs to express its  
pleasure and great satisfaction at the dispatch of  
this Embassy and shall receive it in such way so  
as to prove that the Swiss Government sincerely  
wishes to strengthen and to develop furthermore  
the friendly relations existing between both states,  
and which have been based upon the existing  
Treaty. It will also use its best endeavours to assist  
the Embassy and to further its views in collecting  
every informations concerning political, social, eco-  
nomical and commercial institutions in Switzerland,  
which they might desire to gather.

In consequence of the official dispatch of the

Government of H. I. M. the Tenno, dated the 13th  
of the 10th month of the 4th year Meiji, the Swiss  
Government has taken the necessary steps through  
its diplomatic and consular Representatives at the  
Courts which the Embassy will first visit, so as to  
ascertain beforehand the exact period fixed for  
their visit to Switzerland, in order to enable the  
Swiss Government to make all necessary prepara-  
tions and to keep readiness whatever information  
they might be desirous of collecting.

I have the honor to be  
Your Excellency's  
most obedient and humble servant  
The Consul General for the  
Confederation in Japan  
C. BRENNWALD.

To  
His Excellency  
Guaimukio Soyejima Tanemoni  
Minister for Foreign Affaires  
Tokai.

七五 明治五年三月八日 西班牙國代理公使ヨリ  
西曆一八七五年四月十五日 副島外務卿宛

岩倉大使一行ノ訪問ハ滿悅ナル旨ノ本國政府ヨリノ  
意嚮傳達ノ件

以手翰得貴意候然ハ日本政府において歐米行の特命全權大  
使を命せられ我西班牙國えも可被差送旨先般愚翰を以西班牙  
牙國王アマデオ第一世の政府え進達いたし置候處右回答の  
趣に

天皇陛下より大使發遣被成候一事西班牙政府において承之  
右は賞譽すべき事柄にて實に滿悅の事に存候隨て大使我國  
に到着あらは懇篤友誼を以接待可致存候旨閣下え申進すへ

## 第二節 岩倉大使ト各國トノ條約改正商議

七六 明治五年二月三日 米國國務省ニ於ケル岩倉大使等ト  
西曆一八七五年三月十一日 米國國務卿等トノ對話書

條約改正ニ對スル岩倉大使等ノ權限竝ニ條約中改正  
希望條項等照會ノ件

西曆千八百七十二年第三月十一日 我明治五年申年  
二月三日月曜日

き旨拙者え懇諭申來候付ては閣下より此書翰えの御回答拙  
者え御さし越被下度本國政府え差贈るために有之候此段得  
貴意度如斯御座候以上

千八百七十二年第四月十五日

フィブリヨロドリゲズイムノズ

日本天皇陛下の外務卿輔

副島種臣閣下  
寺島宗則閣下

註 本來翰ニ對シ三月十二日達ニテ副島外務卿ヨリ西班牙國  
代理公使宛「貴政府親睦の情義不堪感謝候」云々ト回  
答セリ

米國華盛頓府國務省ニ於テ日本使節米國聯邦國務卿  
ハミルトンフィッシュ談判筆記大副使五人森少辨務使  
鹽田一等書記官并ニ米國々務卿輔チャレス、ヘール  
及ヒ我領事ブルークス同席

一使節 今日ノ談判ノ趣旨ヲ明亮ニセンカ爲メ既往及近

見テ可然哉

三使 條約中改正スヘキ條件ヲ商議圖論スルノ權アリ余  
等只ニ之ヲ論スルノミニテ今度ノ談判ニテ五ニ陳述  
スル處ヲ日本ニ於テ取結フヘキ條約ノ基トナシ  
天皇陛下自ラ允准セシ後其本書ヲ取替スル管ナリ  
四卿 使節公ニハ草案書ニ調印スルノ權ヲ帶有セラル、  
乎

四使 然リ談判ノ結末ヲ記載スヘキ書面ニ名印スルノ權  
アリ

五卿 貴國皇帝ヨリノ書翰中ニハ其權ヲ與ルコトナシ今  
貴君ノ陳述セラル、所ニ隨ハ別ニ其權ヲ與ラレシコ  
ト、見ユ

五使 然リ  
六卿 此書簡ニテハ條約ノ條款ヲ取極ムルノ權ヲ與ルニ  
非ス只ニ之ヲ論スルノミナリ

六使 今度談判ノ結末ヲ記セルモノニ名印スルコトハ差  
支ナシ

七卿 日本政府ニテハ之カタメ何程ノ引受ヲナス乎  
七使 談判ノ結末ハ多少政府ニテ承諾スヘシ此草案ハ追

二使 其事ハ予等兼テ承知スル處ナリ現今ノ條約ニ因リ  
テハ千八百七十二年七月第一日ヲ以條約ヲ改正スヘ  
キ管ナリ故ニ我政府今此使節ヲ派出シ其條款ヲ熟議  
セシム然ルニ右期限前其使命ヲ完成スルコト能サル  
ニ依リ使命ヲ終ル迄期限ヲ延サンコトヲ望ム  
三卿 各國政府五ニ趣旨ヲ通達シ現今條約ハ千八百七十  
二年七月第一日ニ至リ全ク廢止スヘシトノコトヲ既  
ニ了解ス今度ノ使節ニハ右條約ヲ取結フノ權ナシト  
岩倉大使ノ歐米各國ニ於ケル條約改正商議 七六